

付 録

付1 資料・参考文献一覧

【資 料】

<文書資料>

外交史料館

『^{トルコ}土耳其特派使節「オスマン・パシヤ」来航の件』(第6門4類3号17)

(再録：外務省編『日本外交文書』23巻，日本国際連合協会，1952年、131-135頁)

宮内庁書陵部

『外賓接待録(二)式部職』(明治23年)

国立公文書館

『公文類聚』

(第14編・明治23年・第18巻・外交・条約雑載)

(第14編・明治23年・第48巻・財政12収支1)

トルコ記念館(和歌山県西牟婁郡串本町役場)

『^{トルコ}土耳其軍艦アルトグラール号難事取扱ニ係ル日記』

防衛庁防衛研究所

『明治廿四年公文備考』(巻五 船舶・下)

「^{トルコ}土耳其軍艦遭難始末并助命者送還ノ為メ金剛比叡ニ艦該國ヘ派遣一件」

総理府古文書総局オスマン文書館 Başbakanlık Osmanlı Arşivi (イスタンブル)

主にユルドゥズ分類文書類(Yıldız Tasnifi)所収の文書類

→オスマン語(古典トルコ語)文書のほか，日本から送付された文書類も所収される。

<公刊資料>

* 大山鷹之助 『^{トルコ}土耳其航海記事』東京：大山鷹之助(私家版)，1891年(再刊：『明治シルクロード探検紀行文集成』第10巻，1988年)。

* 小椋元吉・松村龍雄 『軍艦比叡^{トルコ}土耳其古國航海報告』水路部，1893年。

* 賀川純一(編) 『土國軍艦遭難者追吊祭典書』大阪：赤川孫兵衛，1892年。

* 串本町史編纂委員会(編) 『串本町史 史料編』和歌山：串本町史編纂委員会，1988年。

* 宮内庁(編) 『明治天皇紀』全13巻，吉川弘文館，1968-1977年。

* 立脇和夫(監修) 『ジャパン・ディレクトリー：幕末明治在日外国人・機関名鑑』第12巻(1890年)，ゆまに書房，1996年。

* 通信大臣官房 『通信省第五年報』通信大臣官房，1891年(再刊：『明治前期産業発達史資料』(別冊30-IV)明治文献資料刊行会，1968年)。

* 内務省官房 『明治二十三年度功程報告』内務省官房，1891年(再刊：大日方純夫・勝田政治・我部政男編『内務省年報・報告書』14巻，三一書房，1984年)。

* 浜畑栄造(編) 『熊野郷土史讀本』(巻二)和歌山：和歌山県教育会東牟婁郡支会，1923年。

* 同 『熊野の史料と異聞』和歌山：浜畑栄造(私家版)，1974年。

* 同 『続熊野の史料と異聞』和歌山：浜畑栄造(私家版)，1977年。

- * Michael PENN (tr.), “Shotaro Noda’s Chronicle of the Japanese Warships Bound for Turkey (1)–(5)”, 『北九州市立大学法政論集』 29 卷 1/2 号, 2001 年, 29 卷 3/4 号, 2002 年, 30 卷 1/2 号, 2002 年, 30 卷 3/4 号, 2003 年, 31 卷 2/3/4 号, 2004 年.
- * do , “Shotaro Noda’s Chronicle of the Japanese Warships Bound for Turkey Part Two: Hong Kong”, 『北九州市立大学法政論集』 29 卷 3/4 号, 2002 年, 357–77 頁.
(→ 『時事新報』 上に掲載された野田正太郎執筆記事の英訳)
- * 藤戸永綱・磯部謙次郎 『軍艦金剛土耳其國航海報告』 水路部, 1892 年.
- * 松山亮校閔・佐々木米三郎編述 『和歌山縣管内地誌略』 平井書房, 1888 年.

<新聞資料>

- * 『郵便報知新聞』 刊行地：東京, 1872 (明治 5) 年創刊
- * 『東京朝日新聞』 刊行地：東京, 1884 (明治 17) 年創刊, 1888 (明治 21) 年改題
- * 『やまと新聞』 刊行地：東京, 1886 (明治 19) 年創刊
- * 『読売新聞』 刊行地：東京, 1874 (明治 7) 年創刊
- * 『朝野新聞』 刊行地：東京, 1872 (明治 5) 年創刊, 1874 (明治 7) 年改題
- * 『日本』 刊行地：東京, 1889 (明治 22) 年創刊
- * 『時事新報』 刊行地：東京, 1882 (明治 15) 年創刊
- * 『毎日新聞』 刊行地：東京, 1870 (明治 3) 年創刊, 1886 (明治 19) 年改題
- * 『東京日日新聞』 刊行地：東京, 1872 (明治 5) 年創刊
- * 『国民新聞』 刊行地：東京, 1890 (明治 23) 年創刊
- * 『大阪朝日新聞』 刊行地：大阪, 1879 (明治 12) 年創刊, 1889 (明治 12) 年改題
- * 『大阪毎日新聞』 刊行地：大阪, 1876 (明治 9) 年創刊, 1888 (明治 21) 年改題
- * 『東雲新聞』^{しののめ} 刊行地：大阪, 1888 (明治 21) 年創刊
- * 『神戸又新日報』^{ゆうしん} 刊行地：神戸, 1884 (明治 17) 年創刊
- * 『官報』 刊行地：東京, 1883 (明治 16) 年創刊
- * *The Levant Herald*, Constantinople [i. e. İstanbul], 1856 年 (?) 創刊
- * *Musavver Cihan*, İstanbul, 25/Mart/1306 (1890 年) 創刊
- * *The Oriental Advertiser*, Constantinople [i. e. İstanbul], [188–] 年創刊
- * *Resimli Gazete*, İstanbul, 14/Mart/1307 (1891 年) 創刊
- * *Sabah*, İstanbul, 25/Mart/1306 (1890 年) 創刊
- * *Tecüman-ı Hakikat*, İstanbul, 26/Haziran/1295 (1879 年) 創刊
- * *La Turquie*, Constantinople [i. e. İstanbul], 1866 (?) 年創刊

<雑誌資料>

- * 『團團珍聞』^{まるまる} 東京：團團社, 1877 (明治 10) 年創刊
- * 『東京経済雑誌』 東京：経済雑誌社, 1879 (明治 12) 年創刊
- * 『女学雑誌』 東京：万春堂, 1885 (明治 18) 年創刊
- * 『国民之友』 東京：民友社, 1887 (明治 20) 年創刊
- * 『反省会雑誌』 京都：反省会本部, 1887 (明治 20) 年創刊
- * 『日本人』 東京：政教社, 1888 (明治 21) 年創刊
- * 『国光』 東京：国光社, 1889 (明治 22) 年創刊
- * 『国本』 東京：金港堂, 1890 (明治 23) 年創刊
- * 『大東』 東京：亜細亜義会, 創刊年次不明
- * 『日土協定会報』^{にちど} 東京：日土協会, 1927 (大正 15) 年創刊

<自伝・評伝資料（一部研究も含む）>

- * 青木周蔵（坂根義久：校注）『青木周蔵自伝』平凡社，1970年。
- * 青木澄夫『アフリカに渡った日本人』時事通信社，1933年。
- * 石井孝『勝海舟』吉川弘文館，1974年。
- * 石山謙吉（編）『伊藤欽亮論集』（上・下）ダイヤモンド社，1930年。
- * 稲畑勝太郎『歐亞に於いて』日本評論社，1929年。
- * 稲畑勝太郎翁喜寿記念伝記編纂会（編）『稲畑勝太郎君伝』（附録共2冊）大阪：稲畑勝太郎翁喜寿記念伝記編纂会，1938年。
- * 犬塚孝明『寺島宗則』吉川弘文館，1990年。
- * 今泉秀太郎（福井順作：記）『一瓢雑話』誠之堂，1901年。
- * 大谷光瑞『光瑞縦横談』実業之日本社，1936年。
- * 大谷光瑞猊下記念會（編）『大谷光瑞氏の生涯』東京：大谷光瑞猊下記念會，1956年（再刊：大空社，1994年）。
- * 大町桂月『伯爵後藤象二郎』富山房，1914年（再刊：大空社，1995年）。
- * 黒田清隆『環遊日記』全3巻，（出版地・出版社不明），1887年（再刊：『明治欧米見聞録集成』第5-7巻，ゆまに書房，1987年）。
- * 肥塚麒一（編）『肥塚龍自叙傳』東京：肥塚麒一（私家版）1922年。
- * 山樵亭主人『新年山田寅次郎』大阪：岩崎輝彦（私家版），1952年。
- * 関直彦『七十七年の回顧』三省堂，1933年（再刊：大空社，1993年）。
- * 徳富蘇峰『公爵山縣有朋伝』全3巻，1932年（再刊：『明治百年叢書』第88-90巻，原書房，1969年）。
- * 中井弘（＝櫻洲山人）『漫遊記程』全3冊，東京：中井弘，1877（明治10）年
（再録：明治文化研究会（編）『明治文化全集』第7巻，日本評論社，1928年）。
- * 中浜東一郎（中浜明編）『中浜東一郎日記』全5巻 富山房，1992～95年。
- * 西牟田崇生『黎明期の金刀比羅宮と琴陵宥常』国書刊行会，2004年。
- * 西村点南『在南三十五年』安久社，1936年（再刊：西村竹四郎『シンガポール35年』東水社，1931年）。
- * 日本史籍協會（編）『谷干城遺稿』全4巻，日本史籍協會，1912年（再刊：東京大学出版会，1975-76年）。
- * 浜谷由太郎（編）『櫻洲山人の追憶』京都：浜谷由太郎，1934年。
- * 二葉憲香・福嶋寛隆（編）『島地黙雷全集』全5巻，京都：本願寺出版協會，1973-78年。
- * 古川宣誉『波斯紀行』參謀本部，1891年。
- * 柳田泉（編）『福地櫻痴集』筑摩書房，1966年。
- * 山田寅次郎『土耳其古畫観』博文館，1911年。
- * 吉田正春『回疆探検波斯之旅』博文館，1894年（再刊：『回疆探検ペルシヤの旅』中央公論社，1990年）。
- * 渡辺進『夢渡辺洪基伝』浦和：渡辺進，1973年。
- * 「特集：寅次郎奔る」『上州風』14，2003年，10-49頁。

<図版関係資料>

- * 矢部信太郎（編）『近代名士之面影』第1集，東京：竹帛会，1914年。
- * 『近世名士写真』2巻本，大阪：近世名士写真頒布会，1934-35年。
（→上記2点に所収の写真は，国立国会図書館ホームページ上の「近代日本人の肖像」<http://www.ndl.go.jp/portrait/contents>に収録。）
- * 石井謙治『海の日本史再発見』日本海事広報協會，1987年。
- * 霞会館資料展示委員会（編）『鹿鳴館秘蔵写真帖』平凡社，1997年。
- * 木暮正夫（相澤るつ子絵）『救出』アリス館，2003年。
- * 小西四郎『錦絵幕末明治の歴史』第9巻，第10巻，講談社，1979年。

- * 柴四朗（東海散士）『佳人之奇遇』全8冊，東京：柴四朗，1886-1897年。
- * 柴田正（編）『神戸兵庫名勝絵図』熊谷幸介，1886年。
- * 菅谷与吉（編）『波斯新説烈女之名譽』東京：日吉堂，1891年。
- * 測量・地図百年史編集委員会（編）『測量・地図百年史』日本測量協会，1970年。
- * 秀島成忠（編）『佐賀藩海軍史』東京：守岡功，1917年（再版：『明治百年史叢書』第157巻，原書房，1972年）。
- * 藤田健『金刀比羅宮』筑摩書房，2000年。
- * ホンフレー・ブリドウ（林董訳）『馬哈默傳』全2冊、東京：干河岸貫一、1877年。
- * 村上司馬（編）『各国才子寄合演説』東京：文泉堂，1891年。
- * 村上真助（抜粋）『波斯新説烈女之名譽』東京：文泉堂，1887年。
- * 矢野龍溪・東海散士ほか『政治小説集』講談社，1965年。
- * 山内昌之『近代イスラームの挑戦』中央公論社，1996年。
- * 和田克巳（編著）『むかしの神戸』兵庫：神戸新聞総合出版センター，1997年。
- * 『皇族・華族古写真帖』（愛蔵版）新人物往来社，2003年。
- * 『国史大辞典』全17巻，吉川弘文館，1979-97年。
- * 『地図で見る百年前の日本』小学館，1998年。
- * 『明治天皇』（別冊『歴史読本』27巻15号）新人物往来社，2002年。
- * 『横浜いま／むかし』横浜：横浜市立大学，1990年。
- * Ali Fuad & Osman Senai Erdemgil, *Musavver 1904-1905 Rus-Japon Seferi*, 5 vols., İstanbul, 1321 [1903].
- * Andreas BİRKEN & Hans-Henning GERLACH, *Tarih Atlası*, Mantis, 1999.
- * [Georges Edmond Just] DURAND-VIEL, *Les campagnes navales de Mohammed Aly et d'Ibrahim*, 2 t., Paris, 1937.
- * Metin ERÜRTEEN, *Osmanlı madalyaları ve nişanları*, İstanbul, 2001.
- * *Türkiye Diyanet Vakfı İslam Ansiklopedisi*, vols., İstanbul, 1988-.
- * *Yaşamları ve Yapıtlarıyla Osmanlılar Ansiklopedisi*, 2 vols, İstanbul, 1999.

【参考文献：日本語】

<災害全般>

- * 海上保安庁燈台部（編）『日本燈台史』燈光会，1969年。
- * 海上保安庁水路部（編）『日本水路史』日本水路協会，1971年。
- * 金指正三『日本海難救助法制史』東京：金指正三（私家版），1955年。
- * 同 『近世海難救助制度の研究』吉川弘文館，1968年。
- * 川俣馨一『日本赤十字社発達史』日本赤十字社発達史発行所，1911年。
- * 気象庁（編）『気象百年史』（本編・資料編）日本気象学会，1975年。
- * 北原糸子「ノルマントン号事件と義捐金問題」『メディア史研究』7号，1998年，1-39頁。
- * 同（編）『近世災害情報論』塙書房，2003年。
- * 菅谷章『日本医療制度史』三陽社，1976年。
- * 鈴木孝「海難が縁となった国際交流」『海難と審判』144，2004年，1-7頁。
- * 住田正一『日本海法史』巖松堂，1927年（再刊：五月書房，1981年）。
- * 同（編）『海事史料叢書』（全20巻）巖正堂，1929-31年（再刊：成山堂書店，1969年）。
- * 海難審判協会（編）『改定版海難審判史』海難審判協会，1983年。
- * 帝國水難救済會『帝國水難救済會五十年史』帝國水難救済會，1939年。
- * 通信省（編）『通信事業史』（第6巻）通信協会，1941年。
- * 日本経営史研究所（編）『日本郵船百年史資料』日本郵船，1988年。
- * 日本水難救済会（編）『日本水難救済会100年史』日本水難救済会，1990年。
- * 日本郵船株式会社（編）『日本郵船株式会社五十年史』日本郵船，1935年。

- * 日本郵船株式会社総務部弘報室（編）『七つの海で一世紀』日本郵船，1985年。
- * 宮沢清治『防災と気象』朝倉書店，1982年。
- * 山本志保「明治前期におけるコレラ流行と衛生行政：福井県を中心として」『法政史学』56，2001年，51-77頁。
- * 山本俊一『日本コレラ史』東京大学出版会，1982年。

<中央政府関係>

- * キーン，ドナルド（角地幸男：訳）『明治天皇』（上・下）新潮社，2001年。
- * 楠精一郎『列伝・日本近代史』朝日新聞社，2000年。
- * 坂根義久『明治外交と青木周蔵』刀水書房，1985年。
- * 大霞会（編）『内務省史』全4巻，東京：地方財務協会，1970年（再版：『明治百年叢書』第295-298巻，原書房，1980年）。
- * 多木浩二『天皇の肖像』岩波書店，1988年。
- * 松本亨『明治の海舟とアジア』岩波書店，1987年。
- * 三谷博『明治維新とナショナリズム』東京大学出版会，1997年。
- * 湯本豪一（編）『明治人物大事典』日外アソシエーツ，2000年。
- * 若桑みどり『皇后の肖像』筑摩書房，2001年。
- * 渡辺幾治郎『明治天皇』（上・下）東京：宗高書房，1958年。
- * 渡辺宏「林董のマホメツト伝」『日本古書通信』218号，1962年，7-9頁。

<地方史関係>

- * 楠本利夫「戦前における神戸・大阪の外国領事館」『居留地の窓から』4，2004年，31-51頁。
- * 桑原康宏『熊野の集落と地名』大阪：清文堂，1999年。
- * 神戸市役所『神戸市史』（本編総説）神戸：神戸市役所，1922年。
- * 同『神戸市史』（本編各説）神戸：神戸市役所，1925年。
- * 坂本勝比古「神戸外国人居留地の形成とその課題」『居留地の窓から』1，2001年，1-23頁。
- * 洲脇一郎「神戸外国人居留地研究の現状と課題」『居留地の窓から』1，2001年，25-37頁。
- * 新宮市『新宮市誌』和歌山：新宮市，1937年。
- * 田中美津子「神戸のドイツ人：1868年以後，旧き神戸への回想」『居留地の窓から』3，2003年，61-84頁。
- * 同「横浜のドイツ人：1859年以後，旧き横浜への回想」『居留地の窓から』4，2004年，53-65頁。
- * 田辺市役所（編）『田辺市誌』和歌山：田辺市役所，1952年。
- * 兵庫県史編集専門委員会『兵庫県史』（第5巻），兵庫：兵庫県，1980年。
- * 山本喜平『和歌山縣海草郡史』和歌山：和歌山縣海草郡役所，1926年。
- * 和歌山県『和歌山縣災害史』和歌山：和歌山県，1963年。
- * 和歌山県『和歌山縣誌』（上・下巻）和歌山：和歌山縣，1924年（再版，和歌山県『和歌山縣誌』（1-3巻）東京：名著出版，1970年）。
- * 和歌山県警察史編さん委員会（編）『和歌山県警察史』（第一巻）和歌山：和歌山県警察本部，1983年。
- * 和歌山県史編纂委員会『和歌山県史』（1-24巻）和歌山：和歌山県，1975-94年。
- * 和歌山県東牟婁郡役所『紀伊東牟婁郡史』（上・下）和歌山：和歌山県東牟婁郡役所，1917年（再版，大阪：清文堂出版，1989年）。

<メディア関係>

- * 有山輝雄『明治期における『国民新聞』と徳富蘇峰』日本図書センター，1988年。
- * 同『徳富蘇峰と国民新聞』吉川弘文館，1992年。
- * 同『近代ジャーナリズムの構造』東京出版，1995年。

- * 鶴飼新一『朝野新聞の研究』みすず書房, 1985年.
- * 大阪毎日新聞社(編)『大阪毎日新聞五十年』大阪:大阪毎日新聞社, 1932年.
- * 大西林五郎(原著) 宍戸啓一(編)『日本新聞発展史<明治・大正編>』樽書房, 1995年.
- * 奥村弘「開港場・神戸からみた「アジア」:『神戸又新日報』を中心に」『近代日本のアジア認識』(古屋哲夫編) 緑蔭書房, 1996年, 173-7頁.
- * 小野秀雄『日本新聞発展史』大阪毎日新聞・東京日日新聞, 1922年.
- * 相馬基(編)『東日七十年史』東京日日新聞社, 1941年.
- * 津金澤聡廣(編)『近代日本のメディア・イベント』同文館, 1996年.
- * 土屋礼子『大衆紙の源流』世界思想社, 2002年.
- * 東京大学法学部明治新雑誌文庫(編)『明治新聞雑誌文庫所蔵目録(昭和54年3月現在)』東京大学出版会, 1979年.
- * 西松五郎「『神戸又新日報』略史」『歴史と神戸』94号, 1979年, 2-40頁.
- * 日本新聞百年史刊行会(編)『日本新聞百年史』日本新聞百年史刊行会, 1960年.
- * 山本武利『近代日本の新聞読者層』法政大学出版局, 1981年.
- * 山本文雄『日本新聞史』国際出版, 1948年.
- * 『大阪朝日新聞編年史(明治24年)』東京:朝日新聞社史編修室, 1970年.
- * 『毎日新聞百年史』毎日新聞社, 1972年.

<エルトゥール号, トルコ関係>

- * アルク, ウムット(村松増美・松谷浩尚:訳)『トルコと日本:特別なパートナーシップの100年』サイマル出版会, 1989年.
- * 奥山直司「日本から世界へ:哲学館の初期の学生たち」『サティア』46, 2002年, 34-6頁.
- * 同「ランカーの八僧:明治20年代前半の印度留学僧の事績」『インド学諸思想とその周延』(佛教文化学会十周年北條賢三古稀記念論文集刊行会編) 山喜房佛書林, 2004年, 86-103頁.
- * 川村光郎「日土協会:設立の背景と会報について」『アジア資料通報』34-5, 1996年, 1-16頁, 34-6, 1996年, 10-12頁.
- * 小松香織「アブデユル・ハミト二世と19世紀末のオスマン帝国:「エルトゥール号事件」を中心に」『史学雑誌』98-9, 1989年, 40-82, 132-133頁.
- * 同「オスマン海軍の19世紀:近代化をめぐる」『イスラーム世界とアフリカ』(岩波講座世界歴史21) 岩波書店, 1998年, 211-228頁.
- * 同『オスマン帝国の海運と海軍』山川出版社, 2002年.
- * 同『オスマン帝国の近代と海軍』山川出版社, 2004年.
- * 白岩一彦「明治期の文献にみる日本人のトルコ観」『近代日本とトルコ世界』(池井優・坂本勉編) 頸草書房, 1999年, 3-41頁.
- * 杉本英明『日本人の中東発見』東京大学出版会, 1995年.
- * エセンベル, セルチュク「世紀末イスタンブルの日本人」『近代日本とトルコ世界』(池井優・坂本勉編) 勁草書房, 1999年, 71-129頁.
- * 駐日土耳其國大使館『土耳其國軍艦エルトグルル號』駐日土耳其國大使館, 1937年.
- * 内藤智秀「オスマン・パシヤの横濱へ上陸する迄」『史学』8-4, 1929年, 15-30頁.
- * 同「土耳其使節オスマン・パシヤ來朝の使命」『史学』9-4, 1930年, 43-54頁.
- * 同『日土交渉史』泉書院, 1931年.
- * 中濱東一郎「土耳其格軍艦の虎列拉」『衛生新誌』27, 1890年, 1-7頁.
- * 長場 紘「山田寅次郎の軌跡:日本・トルコ関係史の側面」『上智アジア学』14, 1996年, 41-60頁.
- * 同『近代トルコ見聞録』慶應義塾大学出版会, 2000年.
- * 日土貿易協会『土耳其國軍艦エルトグロール遭難追悼記』大阪:日土貿易協会, 1929年.

- * 日本・トルコ協会 70 年史編纂委員会 (編) 『日本・トルコ協会 70 年史』日本・トルコ協会, 1996 年.
- * 波多野勝「エルトゥール号事件をめぐる日土関係」『近代日本とトルコ世界』(池井優・坂本勉編) 勁草書房, 1999 年, 43-69 頁.
- * 森修 (編著) 『トルコ軍艦エルトゥール号の遭難』日本トルコ協会, 1990 年.
- * 三沢伸生「オスマン朝と日本の関係: 山田寅次郎の事績の検証(1)」『イスラーム社会におけるムスリムと非ムスリムの政治対立と文化摩擦に関する比較研究』[札幌: 北海道大学], 2001 年, 216-226 頁.
- * 同 「1890 年におけるオスマン朝への日本軍艦比叡・金剛の派遣: エルトゥール号遭難に対する日本社会の反応」『東洋大学社会学部紀要』39-2, 2001 [2002] 年, 55-78 頁.
- * 同 「1890 年におけるオスマン朝に対する日本の義捐金募集活動: 「エルトゥール号事件」の義捐金と日本社会」『東洋大学社会学部紀要』40-1, 2002 年, 77-105 頁.
- * 同 「明治時代にオスマン帝国へと渡った日本人: 野田正太郎と山田寅次郎」『日本-トルコ友好史展: アジアの西と東を結ぶ 19 世紀のロマン』東京: キュレイターズ, 2003 年, 38-47 頁.
- * 同 「1890-92 年におけるオスマン朝に対する日本の義捐金処理活動: 日本社会にとっての「エルトゥール号事件」の終結」『東洋大学社会学部紀要』41-1, 2003 年, 57-91 頁.
- * 同 「1890~1893 年における『時事新報』に掲載されたオスマン朝関連記事: 日本初のイスラーム世界への派遣・駐在新聞記者たる野田正太郎の業績」『東洋大学社会学部紀要』41-2, 2004 年, 109-146 頁.
- * 同 「明治時代の日本における外国船海難事故処理: 「エルトゥール号事件」の場合」『消防防災』8, 2004 年, 28-32 頁.
- * 同 「1890 年の「エルトゥール号事件」発生現場における初期対応: 明治期の日本における外国船海難事故かかわる災害教訓史料としての『沖日記』の重要性」『東洋大学社会学部紀要』42-1, 2004 年, 95-128 頁.
- * 同 「1890 年の「エルトゥール号事件」に対する行政の初期対応: 明治期の日本における外国船海難事故かかわる公文書史料の諸問題」『東洋大学社会学部紀要』42-2, 2004 [2005] 年, 121-163 頁.
- * 『日本-トルコ友好史展: アジアの西と東を結ぶ 19 世紀のロマン』東京: キュレイターズ, 2003 年.

【参考文献: 外国語 (英語・仏語・トルコ語など)】

- * Association commerciale turco-japonaise, *Note commémorative de l'infortune "Ertgrol" vaisseau de guerre turc*, Osaka, 1930.
(→日土貿易協会『^{トルコ}土耳其國軍艦エルトグロール遭難追悼記』の仏語訳)
- * Çetinkaya APATAY, *Ertuğrul Fırkateyni'nin Öyküsü*, İstanbul, 1998.
- * Çetinkaya APATAY, *Türk Japon İlişkileri ve Ertuğrul Fırkateyni'nin Öyküsü*, İstanbul, 2004.
- * Fahri ÇOKER, "Ertuğrul ve Refah Faciaları ve Şehitlerimiz", *Deniz Kuvvetleri Dergisi*, 78-476, 1972.
- * Canan ERONAT (ed.), *Ertuğrul Suvarisi Ali Bey'den Ayşe Hanım'a Mektuplar*, İstanbul, 1995.
- * Selçuk ESENBEL, "İstanbul'da bir Japon :Yamada Torajiro", *İstanbul*, 9, 1994, pp.36-41.
- * do , "A fin de siècle Jananese romantic in Istanbul : The life of Yamada Torajiro and his Toruko Gakan", *Bulletin of the School of Oriental and African Studies*, LIX-2, 1996, pp.237-252.
- * do , "Japanese perspectives of the Ottoman world" in *The rising sun and the Turkish crescent* (Selçuk Esenbel & Inaba Chiharu eds.), İstanbul, 2003, pp.7-41.
- * R. Hüsrev GEREDİ, *Mübarek Ertuğrul Şehitlerimiz ve Muheşem Anıtlar*, İstanbul, 1956.
- * Arif Hikmet Fevzi ILGAZ, Hasene ILGAZ, *Ertuğrul Fırkateyni*, İstanbul, 1990.
- * Kaori KOMATSU, "100'üncü Yıldönümü Münasebetiyle <Ertuğrul Fırkateyni> Faciası," 『日本中東学会年報』5, 1990, 113-172 頁.
- * do , *Ertuğrul Faciası : bir dostluğun doğuşu*, Ankara, 1992.
- * Nobuo MISAWA, "Relations between Japan and the Ottoman Empire in the 19th Century : Japanese Public Opinion about the Disaster of the Ottoman Battleship *Ertuğrul* (1890)", 『日本中東学会年報』18-2, 2003 年, pp.9-19.

- *Erol MÜTERCİMLER, Mim Kemal ÖKE, *Ertuğrul Fırkateyni Faciası*, İstanbul, 1991.
- *Erol MÜTERCİMLER, *Ertuğrul Faciası ve 21. Yüzyıla doğru Türk- Japon İlişkisi*, İstanbul, 1993.
- *Osman ÖNDEŞ, *Ertuğrul Fırkateyni Faciası*, İstanbul, 1998(2d.ed.).
- *Süleyman Nutku, *Ertuğrul Fırkateyni Faciası*, İstanbul, 1911.
- *F. Şayan ŞAHİN, “Ertuğrul Faciası Şehitlerinin Aileleri için Girit Vilayeti’nde Toplanan Yardım”, *Türk Dünyası Araştırmaları Dergisi*, 105, 1996, pp.99-105.
- * do , “Ertuğrul Faciası Şehitlerinin Aileleri için Ülkede Toplanan Yardım”, *Türk Dünyası Araştırmaları Dergisi*, 112, 1998, pp.109-152.
- * do , *Türk-Japon Siyasi İlişkileri (1876-1908)*, İzmir, 1998(unpublished Ph.D. thesis).
- *F.Şayan ULUSAN ŞAHİN, *Türk-Japon İlişkileri (1876-1908)*, Ankara, 2001.
- *Ziya ŞAKİR, *Sultan Abdülhamid ve Mikado*, İstanbul, 1994(2d.ed.).
- *Türkiye Cumhuriyeti Tokyo Büyük Elçiliği, *Türk-Nippon : Dostluğunun sonsuz hatırası Ertuğrul, Tokyo : Türkiye Cumhuriyeti Tokyo Büyük Elçiliği*, 1937.
(→駐日土耳其國大使館『土耳其國軍艦エルトグルル号』と同一書。並列タイトル)

付2 関連情報

次の施設やホームページで、本報告書を理解するうえで役立つ情報を得ることができます。

- 外交史料館 <http://www.mofa.go.jp/mofaj/annai/honsho/shiryo/>
外務省管轄下に日本の外交関係の史料を収蔵します。
- 宮内庁 <http://www.kunaicho.go.jp/>
旧宮内省文書も保管され、日本史研究にとって重要です。
- 国立公文書館 <http://www.archives.go.jp/>
文書や文書目録の電子化など公開に力を注いでいます。
- 防衛庁防衛研究所 <http://www.nids.go.jp/>
戦前期の日本史研究にとって重要な文書資料の宝庫です。
- 気象庁 http://www.jma.go.jp/JMA_HP/jma/index.html
気象関連の情報全般の中心的存在です。
- 海上保安庁 <http://www.kaiho.mlit.go.jp/>
海図をはじめ海難問題に必須の海洋情報を提供します。
- 海難審判庁 <http://www.mlit.go.jp/maia/>
日本における海難情報に関する詳細な情報を有します。
- 日本水難救済協会 <http://www.mrj.or.jp/>
明治時代から民間の水難救済組織として重要な存在です。
- 日本海難防止協会 <http://www.nikkaibo.or.jp/>
海難防止の目的で設立された社団法人です。
- 燈光会 <http://www.mmjp.or.jp/tokokai/>
日本の灯台に関する様々な資料・情報を提示しています。
- 日本赤十字社 <http://www.jrc.or.jp/>
赤十字社の歴史に関して極めて詳細な情報を提供します。
- 近現代日本政治関係
人物文献目録 <http://refsys.ndl.go.jp/hito.nsf/Internet?OpenFrameset>
国立国会図書館が運営する近現代史文献情報の目録。
- 和歌山県立公文書館 <http://www.wakayama-lib.go.jp/monjyo/montop.htm>
和歌山関連公文書の保存・公開に力を入れています。
- 和歌山県立中央図書館 <http://www.wakayama-lib.go.jp/library/>
和歌山県関連の郷土資料関連図書・雑誌の宝庫です。
- 兵庫県公館県政資料館 <http://web.pref.hyogo.jp/bunshoka/rekisi/siryokan/>
近代における神戸の果たした役割を詳細に明示します。
- 神戸市文書館 <http://www.city.kobe.jp/cityoffice/06/014/top.html>
『神戸又新日報』目録や神戸の年表・地図・図版が豊富。
- 神戸市立図書館 <http://www.city.kobe.jp/cityoffice/57/070/welcome.html>
兵庫県・神戸関連の郷土資料関連図書・雑誌の宝庫です。
- 神戸市立博物館 <http://www.city.kobe.jp/cityoffice/57/museum/main.html>
神戸資料はもちろん錦絵のコレクションでも国内有数。
- 駐日トルコ大使館 <http://www.turkey.jp/>
トルコ共和国関連情報全般に詳細です。
- トルコ記念館 <http://www.turkey.jp/>
和歌山県西牟婁郡串本町樫野 1025-26 電話：0735-65-0628
「エルトゥールル号事件」関連遺物・資料の総本山です。

付3 神奈川県庁から宮内省に提出された『土耳其格虎列刺病消毒處分概要』（写真版）

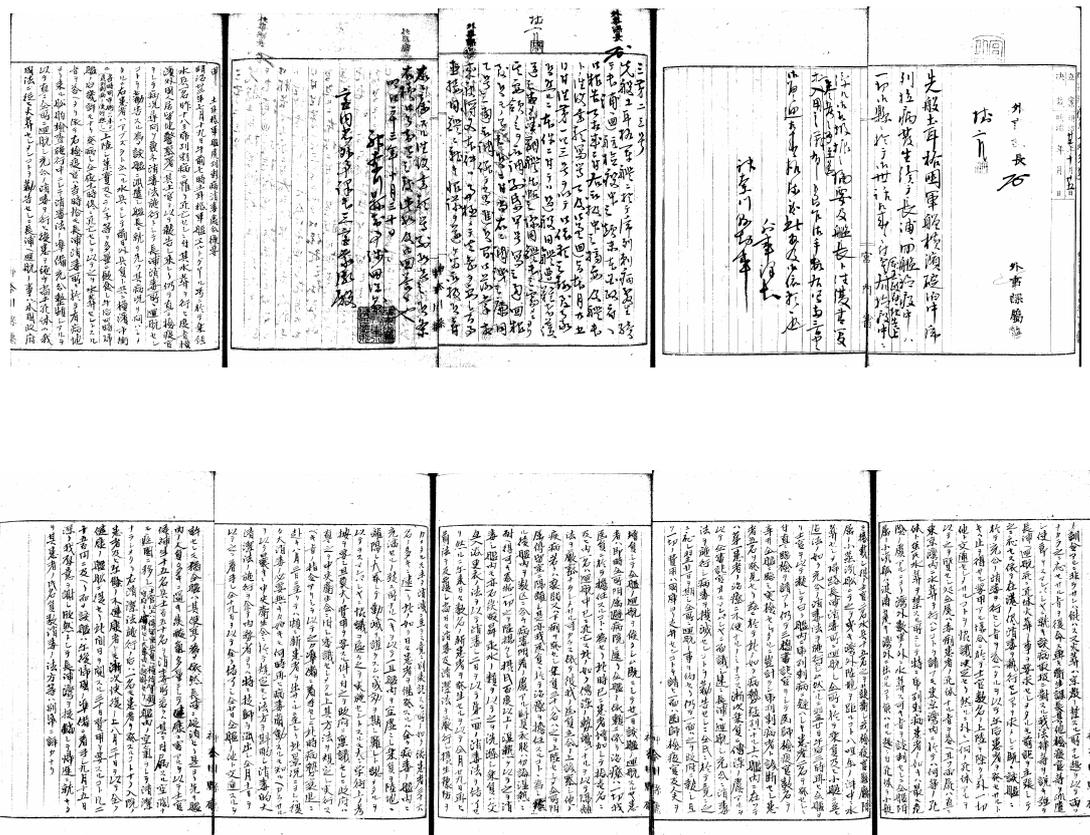
本文中に記したように、エルトゥールル号は横浜滞在中にコレラ禍に見舞われて、長期間、横須賀の長浦消毒所に隔離されることとなった。

従来まで、この間の事情については断片的にしか情報が伝えられてこなかったが、今回の調査にて、宮内庁に保管される旧宮内省文書『外賓接待録(二)式部職』（明治23年）に、神奈川県庁が作成して宮内省に提出された『土耳其格虎列刺病消毒處分概要』が所収されているのが発見された。現在のところ、神奈川県庁や旧・長浦消毒所（現・長浜検疫所）においても関連資料は喪失したのか紛れてしまったのか見当たらない。宮内庁書陵部に保存されることで戦禍による喪失を免れて、今日まできちんと伝わってきた資料である。

現状において、エルトゥールル号におけるコレラの発生から消毒完了に至る過程をつぶさに追うことが可能なばかりか、明治期の日本におけるコレラ対策資料としても極めて資料価値の高い第一級の資料である。

本報告書は、エルトゥールル号の海難を主眼としているために、紙片の都合上、本文中において、本資料を十分に分析することがかなわなかった。資料内において記述内容の矛盾が見られる箇所があり、精査が必要ではあるが、コレラの発症や患者の治癒・死亡の別を日を追って記すなど、貴重な情報を有する。

以上のことから、以下に写真版を付するものである。



写真（付）3-1 『土耳其格虎列刺病消毒處分概要』①【出典：『外賓接待録（二）式部職』】

付4 『沖日記』(校訂版・写真版) (旧漢字は常用漢字に改め、難読語にはルビを振った)

明治二十三年九月

トルコ
土耳其軍艦アルトグラ号難事取扱ニ係ル日記

難事取扱事務出張所

出張吏員

東牟婁郡警察署長 清水廣次

同 古座分署長 小林征一

巡查

川島犬楠 森本角三郎 芦原亀二郎

岩橋富二郎 木村実 小山啓二郎

塩橋寿三郎 土屋森之丈

右

沖周 菱垣芳松 橋爪仁蔵 山本重一郎

木野仲輔

明治二十三年九月十七日午前第十時三十分本村大字檜野崎灯台下東海岸ナル字(コジヨチ)ニ於テ外国商船難破ニ罹リ乗員ノ内死者及負傷者有之ニ付医師同伴出張ノ義檜野崎区長齋藤半右衛門ヨリノ届出ニ接シタルヲ以テ直ニ其旨郡役所ヘ急行直夫ヲ発シ本県庁ヘハ田邊電信局ニ囑託シテ電報ヲ発セシメタルト同時ニ医師松下秀伊達一郎ノ二氏ニ其旨ヲ告ケテ出張ノ調度ヲナサシメ且ツ食用品ヲ調度シ書記菱垣芳松及傭員等ヲ随ヘ巡查川嶋犬楠及医師同行出張ノ途負傷者ノ意外ニ多数ナル事ヲ承知シ更ニ医師川口三十郎ヘモ出張ノ義ヲ照会シ檜野区ニ到着セシハ正ニ午前第十一時三十分ナリシ

同時齋藤区長就キ該顛末ヲ尋問セシニ本日午前第六時当地ノモノ採藻ノ為メ海岸ヘ出業ノ途次乗員ニ出会追々負傷者等ノ上陸シツアル旨報シ来リシヲ以テ直ニ現場ニ至リ視ルニ船体ノ碎片宛モ山ヲナシ海面死体ノ激波中ニ浮遊シタルヲ以テ直ニ人夫ヲ出シテ負傷者ヲ担荷寺院ニ移サシメ且ツ灯台ニモ上陸シタル由而シテ彼等ノ本国ハ土耳其タル事ハ稍判シタルモ未ダ其汽船ト帆走船タル事及ヒ商船ト軍艦ノ区別且ツ乗員ノ全数及死亡者ノ員数等言語不通ノ為メ承知スルニ由ナク唯上陸者凡ソ六十余名ニシテ内五十名ハ負傷者ナリ之ヲ寺院ト灯台官舎ニ居セシメ当地医師小林建齋ヲシテ治療ヲ施サシメシモ未ダ全キヲ得ザルヲ告グ

茲ニ於テ医師松下秀伊達一郎氏ト同行寺院灯台ノ負傷者ヲ檢スルニ灯台ニ居ルモ狹隘ニシテ到底加療セシメルニ適セス故ニ治療ヲシタルモノハ重傷者タルヲ以テ之ヨリ直ニ同台官舎内ニ於テ治療施術シ漸次和館舎ニ移シタルモノハ漸々大嶋ニ移ス其数十八名其他ノ負傷者ハ寺院ニ送ル右ハ灯台主任ヨリ事務上差支フル旨ヲ以テ移転ノ事ヲ頻リニ協議セシヲ以テ終ニ処置茲ニ及ビタリ而シテ医師川口三十郎ハ正午当地ニ着セシヲ以テ之ヲ寺院ニ向ケ同所負傷者二十余名ヲ治療セシメタリ

是レヨリ先キ書記菱垣芳松傭員山本重一郎ヲシテ巡查同行遭難現場ニ出張セシメ専ラ漂着ノ死体及物品保安ノ事ニ従事セシム

書記及傭員等ガ現場ニ出張スルト同時ニ灯台ニ上陸セシ重立チタルモノニ就キ難事ノ顛末ヲ尋問セシモ何分言語不明ニシテ判然セザルモ漸ク手真似等ヲ以テ国名及船形船号乗組人員等稍判然セリ併シナガラ其他ノ件ニ至テハ兎角弁別スル事ヲ得ス故ニ灯台主任滝澤正浄ニ就キ尋問セシニ船種ハ帆走船ニシテ横浜出帆ハ本月九日其後二日間長浦ニ檢疫ノ為メ滞舟シタル云々他ハ前聞ト敢テ異ナル所ナカリキ

然ルニ上陸シタル乗員ヲ視ルニ中ニハ水兵ノ服ヲ着スルモノアルニ因リ果シテ本船ノ軍艦タル事ヲ認知シ且ツ死者ノ数百人ニ及ビタルノミナラス貴顕ノ向モ乗艦アラセラル由粗ボ承知シ茲ニ事ノ重大ナル事ヲ察シ其談話セシモノニ就キ自

分ト同行神戸ニ赴カン事ヲ謀リシニ彼レハ手真似ヲ以テ衣服ト金錢ナキニヨリ^{たとい}仮令望ムモ得ヘカラザルモノ、如ク迷惑ノ旨申立ルニ付^{その}其辺ハ渾テ拙者ガ弁理シ幸ニ本日大嶋港ニ寄泊シアル汽船防長丸ニテ同行出帆セン事ヲ約ス彼レ之ヲ諾シ尋テ今一人ヲ要シ都合二人神戸ニ赴ク事ヲ決定即チ同道シテ区長事務所ニ歸ル時正ニ午後四時ナリ

^{あたか}恰モ好シ此時防長丸船長運転手機関手等ハ此大難事ヲ聞知シ実況調査シ且ツ急時ノ便ヲ得セシメン事ヲ要シ当地ニ来会スルヲ聞キ直ニ呼寄セ神戸ヘ出発スル事ヲ談セシニ素ヨリ同業上ノ義務ヲ以テ応諾セリ偶々船長及機関手が英語ニ通シ且ツクシク外国軍艦ノ乗員タリシ趣ヲ承知シ之ニ命シテ通弁ノ事ヲ托ス其^{その}媒介ヲ得テ判明セル事項左ノ如シ

- 一 土耳其軍艦 汽船
- 一 艦号 アルトグラ
- 一 馬力 六百馬力
- 一 トン数 一千一百トン
- 一 大砲 大十門 小十門
- 一 檣^{しょう} 三本
- 一 艦員 六百五十名

内

五百八十七名 死亡

残員六十三名 存生上陸

内

五名 無事

五十八名 負傷者

皇族^{トルコ}(土耳其皇弟タル事ヲ述ブ) ヲスマンパシャ殿下

- 一等艦将 アレペー
- 二等艦将 ニユルペー
- 三等艦将 ナーマーツ
- 四等艦将 ハイダール

右四等艦将ハ予ト灯台ニ於テ談話シ且ツ神戸ニ至ル為メ当事務所ニ同行セシ方ニシテ英語英文字ヲ能クシ^{いささ}カ聊カ談話ノ効アリ而シテ今マ防長丸船員ノ談話モ専ラ本人トノ間ニ於テ為シタルモノナリ

楽隊長 イスマイル

右楽隊長ハ予ト灯台ヨリ同行セシ一人ニシテ四等船長ハイダール氏ト共ニ神戸ニ到リシ人ナリ

- 一等機関手 イフラエンブ
- 二等機関手 アフメーパ
- 三等機関手 アリコー

横浜解纜ハ本月十四日ニシテ神戸ニ到ルノ途次進航中同十六日午後第四時^{かみのせ}野崎暗礁(上ミ瀬ナラン)ニ衝突シ機関及艦底破裂シ激波ノ為メ同十時頃灯台下東側海岸ヘ漂着セシ云々ナリ

左ノ二名ハ難事実況具申処分ト等ニ関シ汽船防長丸ニテ神戸ニ到ルニ会テ自分モ同行ノ事ヲ示シタリシモ本件処理ノ為メ同行シ難キヲ告ケ代理トシテ臨時村役場雇員橋爪仁蔵ヲ随行セシムル事ニ決シ兵庫県知事ヘ対シ右難事ノ実況ヲ具シ其^{その}処分方同國領事庁ヘ掛合等ノ依頼書付シ旅費手宛トシテ金十円ハハイダール氏ニ貸与シ十五円ハ付添人橋爪仁蔵氏ニ携帯セシメ其^{その}衣食ノ如キハ防長丸船長ヘ直接囑託シテ当地出発セシハ午後五時頃ナリキ

四等艦将 ハイダール

楽隊長 イスマイル

尋テ本県庁ヘハ嚮キノ電報ニ対シ通弁ヲ得テ聞取タル詳細ヲ再報スルト共ニ海軍大臣及呉鎮守府ヘ対シ各々電報ヲ発ス午後第五時過小林古座分署長ハ巡査ヲ随ヘ出張セリ同十時ハイダール氏外一名ヲ護送スル為メ隨行ノ巡査ヲ發セシム同夜当地ニ残りタル負傷者治療ノ為メ醫師川口三十郎松下秀ノ二氏滞泊セシム

同夜十一時特ニ直夫ヲ馳セ明日前十時發ノ郵便ヲ謀リ県庁郡役所ヘ詳細ナル書面ヲ^{むろ}西牟婁郡串本郵便局ヘ發送ス本日使役セシ人夫ハ齋藤区長ニ於テ雇入シ専ラ負傷者ヲ担荷及看護等ニ要スルニアリ

明十八日死体及船具ノ保安ヲ要スル為メ直夫ヲ馳テ大嶋須江ノ両大字へ出夫ヲ命シ夫々計画ヲ全フス
本日死屍ノ検視ヲ為シタルモノ 四人 但共同墓地へ埋葬

十八日 天気時トシテ降雨

本日ハ海面漂流スル死屍引揚ノ為メ榎野須江大嶋ニ命シテ船及人夫ヲ出サシム而シテ須江出ヅルモノハ東南海岸ヲ搜索セシメ大嶋ヨリ来ルモノハ西内側浜海面ヲ捜ラシムルモ激波ノ為メ舟ヲ磯際ニ達スル克ハザルヲ以テ各字ヨリノ出夫ハ海岸船滓ノ内ヲ捜査セシム

午前十時榎野大龍寺ニアル負傷者ハ室内狭隘ヲ来シ諸事不都合ヲ感セルヲ以テ四十五名ヲ大嶋ニ移転セシムル事トシ之ニ医師松下秀川口三十郎ノ二氏ヲ付シ小舟ヲ要シテ同地蓮生寺ニ送ル但シ之ヲ移転セシムル以所ノモノハ蓮生寺ハ構造大龍寺ヨリ広大ニシテ且ツ空気ノ流通食物ノ調達舟運ノ便等ヲ謀ルニアリ

茲ニ於テ大嶋蓮生寺ヲ仮リニ負傷者ノ病室トシ患者ノ輕重ヲ區別シ各自へ番号標ヲ交付シ之ニ看護者數十人ヲ置キ各受テ定メテ看護怠ラサルヲ勉メ而シテ士官及壯健者へハ各室ニ小使ヲ付シ用ヲ弁セシム

食物ハ特ニ賄人ヲ定メ其望ム所ヲ調度シ其他ノ請求ノ物品ハ時々之ヲ与フル等其經濟ヲ取締ル為メ岩谷喜三平芝三次郎ノ二氏ヲシテ専ラ之ニ従事セシム

右大嶋ニ移転セシメタル負傷者等ノ監督ハ助役木野仲輔ヲ以テ統轄セシメタリ

上陸者ノ内ママタリー及ブフザーン外二名ヲ榎野ニ殘シタルハ死体及臨機処分ノ件等商議ヲ要スルガ為ナリ

同日午前第十時東牟婁郡警察署長清水広治氏ハ巡查森本角三郎蘆原亀三郎ノ二氏ヲ隨へ出張セリ尋テ東牟婁郡長代理同郡書記坂本隆氏モ出張セリ

死体ノ海面ニ漂流スルモノ多キヲ以テ一々所定ノ墓地ニ埋葬スル事ハ実地ノ狂隘ヲ来シ加之里裡十余町ヲ懸隔スルヲ以テ其運搬ノ不便ヨリ多額ノ費用ヲ要スルノミナラズ皇族ノ遺骸ヲモ埋葬スル計画ナルヲ以テ特ニ將來ヲ慮リ臨場警察官ト申合せ更ニ便宜ノ地ヲ選定シテ埋葬セン事ヲ要シ茲ニ於テ軍艦遭難場ニ接近セル字尾崎南側山野ヲ以テ埋葬地ヲ設定シ本日ヨリ取揚ル所ノ死体ハ渾テ茲ニ埋葬セシムル事ト定ム

前日漂着セシ死屍四人ハ旧墓地ニ埋葬セシメタリ

死体ハ渾テ寝函ヲ新調シテ埋没スル事ニ決定セシヨリ各所ニ馳セ用材ヲ購求ス

串本神田商会汽船部ヨリハ神田丸會計鈴木純太郎外一名ヲ当地へ出張応分ノ義務ヲ果サン事ヲ述フ

潮岬村役場ヨリ態々出張慰問セラル

本日ヨリ土耳其軍艦遭難事件結了ニ至ル迄事務所ヲ榎野ニ置ク事ヲ公示ス

各大字重立タルモノハ本件ニ付義務ヲ以テ相当ノ役ニ従事セン事ヲ申出ニヨリ夫々へ人夫若干ヲ付屬セシメ人夫使役ノ長トス

本日検視済死体四人、新墓地へ埋葬

十九日

本日ハ海上稍々静穏ナルヲ以テ海面ニ散流セルモノ及海岸ニ漂着スル死体曳揚ノ為メ数艘ノ小舟又ハ人夫ヲ各海浜ニ馳セシメ専ラ捜査ノ事ニ従事セシム

当日ハ死体ノ揚ルモノ 頗ル夥多ナルヲ以テ死屍ニ接スルモノハ普通ノ人夫ニテ到底扱ヒカネルニヨリ更ニ [] ヲシテ取片付方及ビ運搬ノ事ヲ受負シム其賃銀ハ死体一人ニ付四十錢ト定ム

皇族ヲスマンパシヤ殿下ノ容貌ヲ詳知セシヲ以テ特ニ新宮町以南西牟婁郡 潮 岬 村ニ至ル沿海諸村へ通知シ該遺骸ト認ムルモノハ埋葬ニ先チ急報セラレン事ヲ報告スルト同時ニ出役ノ人夫ニ對シ殿下ノ遺骸ヲ認メ之ヲ引渡シタルモノニハ特別ノ賞与ヲ為ス旨ヲ公示シ以テ皇族殿下ノ遺骸ヲ速知スル事ニ勉メタリ

午後二時田原村役場ヨリ死体五人漂着セシ旨直夫ヲ以テ照会シ越シタルニヨリ皇族殿下ノ外ハ其他ニ於テ埋葬被取計度旨回答セリ

乗員四名居残りノ内ママタリー外一名ハ大嶋ニ移ラン事ヲ希望シテ止マザルヲ以テ之ヲ護送セシメブラザーン及付屬一名ハ当榎野ニ在テ専ラ死体ノ鑑別ニ従事セリ此二名ハ齋藤半之右エ門ニ宿泊ス

同三時頃前日大嶋ニ送リタル内機関手アリーフ水兵「パツサブヘフセー」及「デヌルジーアシーシ」同行榎野崎ニ来リ死体等ノ検シタル後灯台ニ休憩セルブラザーンニ對シ痛ク論糾スルモノ、如シ暫シテ退出尋テ小生ハブラザーント同行検視場ニ至ラントセシニ卒然路傍ニ右水兵二名顯ハレ彼ノブラザーンヲ押シ伏セ懷中ヲ搜リ指環ヲ奪ハントスル状実乱暴極

マル処置ナルヲ以テ立入り調停ヲ試シモ却テ予ニ抗スルニヨリ直ニ警部ニ報シテ之ヲ制止ス其原因スル所ヲ聞クニ彼本日現場ニ来リシ際上衣ヲ着セシ主計課員ノ死体アルニヨリ其懷中ヲ搜リシニ一円銀貨一枚ト都合二十錢銀貨一枚ト都合二枚アリシヲ以テ之ヲ彼水兵二名ニ与ヘブラザーン自分ハ其指環ヲ取りテ己レノ指ニ嵌メタルニヨリ彼水兵ハ尚隱匿ノ疑念ヲ起シ茲ニ此争ヲ呈出シタルモノノ如シ

其後三名ハ直ニ大嶋ニ帰ル

本日検視済死屍五十九人、内四人広浦埋葬 外五人田原へ

二十日 晴天

本日モ海面ニ漂流スル死体取揚ノ為メ各大字ヨリ舟人夫ヲ出ス

午前七時頃外国軍艦一艘西ヨリ来ル当樫野崎則チ土耳其軍艦遭難場所ニ近ツキ静ニ進航シツゝ大嶋港ニ向ヒタリト暫クシテ大嶋役場ヨリ土耳其軍艦遭難者救助ノ為メ独乙軍艦入津セリト報シ来リ瞬間ニ直夫再三ニ及ブ因テ態船ヲ仕立大嶋ニ向ヒタルハ正ニ午前第九時ナリキ

然ルニ大嶋ニ寄港セシ軍艦ハ独乙軍艦ウオルフ号ニシテ嚮キニ神戸ニ護送セシハイダール外一名ノ申立ニヨリ兵庫県庁ヨリ同国領事へ掛合タルヲ以テ右救助ノ為メ兵庫県外務課員長野桂太郎氏乗組当役場ヨリ護送セシ橋爪仁蔵モ同艦ニテ帰省セリ

東牟婁郡長赤城維羊殿ニモ昨夜来大嶋ニ出張シ負傷者ノ実況調査ノ為メ同地ニ滞在スルヲ以テ負傷者引渡方諸事取計中ニアリ囚テ寺院ニ至レバ則チ早ヤ夫々同艦へ積移シ中ニテ艦長軍医兵庫県外務課員ニ接セシニ右塔載ノ上ハ直ニ本艦ヲ樫野崎ニ回漕シ埋葬ノ式ヲ施行スベキニヨリ夫々準備ノ計画ヲ為スバシト故ニ直夫ヲ樫野係吏ニ馳セ尙装置ノ器具等ヲ回送セシメ郡長及木野助役ト俱ニ同艦ニ搭シテ船首ヲ樫野崎ニ向ケシハ正午十二時ナリシ

進航中艦内発砲ノ準備ヲ整ヘ正ニ灯台下ニ至リシハ零時三十分然ルニ突然東風波ノ連テ起リ海岸波ヲ蹴テボートヲ漕着スル克ハス追々天候ノ不穩ナルヲ以テ汽笛一声ヲ報シテ大嶋ニ帰港シ郡長及小生等上陸同艦ハ瞬速神戸ニ向テ進航セリ正時午後一時ナリ

赤城郡長ハ遭難地視察ノ為メ樫野ニ到ル木野助役随行セリ

午後三時ゼルマン軍艦ノ入津セシ顛末ヲ海軍大臣及ヒ呉鎮守府へ電報シ本県庁へモ特ニ負傷者等搭載ノ始末ヲ郵報ス

独乙軍艦へ負傷者及壯健者合セテ六十五名ヲ引渡シタルモ其証明証ヲ得サル由ニ直ニ兵庫県庁外務課員へ依頼シ同国領事館ヨリ書面ノ回送アラン事ヲ托ス

午後六時三十分神田丸大嶋ニ寄港スルヲ以テ必スヤ官吏ノ出張セシト察シ同船ニ至ルニ果シテ秋山書記官ノ一行ニテ今回知事代理トシテ実地ニ向ヒタリト而シテ土耳其軍艦遭難ノ事及セルマン軍艦ノ来リテ負傷者ヲ搭載シ歸リタル顛末ヲ尋問ニ応シテ答陳ス同官ノ一行ハ大嶋播本政太郎方ニ宿セリ

秋山書記官 警部補舟橋義一

本県雇井上齊 永井西牟婁郡書記

医師山本某

右五名ナリ

深見西牟婁郡書記及医師山本某ハ負傷者ノ神戸ニ向ヒタルニヨリ同夜神田丸ニテ帰田ス

同夜赤城郡長ハ秋山書記官ノ照会ニヨリ大嶋へ帰ル既ニ午後八時ナリ

同夜西牟婁郡長秋山徳隣氏ハ書記一名ヲ随ヘ大嶋へ出張セリ

本日、検死ノモノ十八人

五人 下田原村へ

一人 串本へ

五人 浦神へ

二十一日 晴雨定カナラス

午前第七時秋山書記官ノ一行及東西牟婁郡長及ビ随行郡吏員ト共ニ大嶋ヨリ態船ヲ発シ樫野遭難ノ現場視察ノ為ニ来ル海面波高クシテ且ツ強雨頻々一同困却漸ク同八時樫野ニ達ス直ニ上陸現場ニ至ラントスルニ同所灯台下東海ニ我国軍艦ノ進航シ来ルヲ認メ果シテ八重山艦ナラント思想シ予ハ書記官ノ命ヲ奉シテ灯台ニ到リ信号ヲ以テ艦名并ニ用向ヲ問ントス然ルニ同艦ハ汽笛ヲ発シ運転ヲ止メテ徐々ニ大嶋港ニ到ラントス故ニ小舟ヲ発シテ官吏実地出張ノ旨ヲ伝ヘシメントスルモ

達スルヲ得ス

故ニ予ハ赤城郡長ニ随ヒ特ニ態舟ヲ發シテ同艦ニ至ル時巳ニ午前第十一時ナリ

然ルニ大嶋村役場木野仲輔及申本村長神田文左エ門ノ二氏ハ既ニ本艦訪問ノ為メ来ルアリ茲ニ於テ郡長ハ土国軍艦遭難ノ概略トゼルマン軍艦負傷者搭載ノ件等陳ブ尋テ小生ハゼルマン軍艦ノ埋葬式準備セシ云々ヲ述ヘシニ同艦ニ於テモ現ニ死屍一人沖合ニ於テ十ヒ得タレバ之ガ埋葬式ヲ舉行セントスルニヨリ該死屍ハ樫野埋葬地ニ回漕シ追テ士官兵員等実地ニ出張スベキニヨリ夫々準備方ヲ命セラレ直ニ其旨ヲ樫野駐在ノ吏員ニ急報シ赤城郡長ト供ニ士官兵員ノ一行ニ伴随シテ樫野埋葬地ニ到達セシハ同日午後三時頃ナリ其会葬セシ人員ハ士官官兵員共合計三十余名時ニ降雨頗ル繁キニヨリ一時灯台官舎ニ休憩ス葬儀ヲ行フニ先チ本艦ヨリ携帯シ来レル衣食ヲ土国軍艦乗員ブラザーン外一名ヘ与ヘタリ

午後四時半埋葬式ヲ行フ兵員二十五名ハ墓前ニ整列シ指令官長一名之ニ属ス他ハ艦長以下軍医大監及士官ニシテ則チ発砲ノ礼式ヲ行ヒタルハ同五時ナリ尤モ皇族艦長以下兵員ノ墓前ニ於テ拜礼セシハ艦長及軍医并ニ士官ヲ初メトシ尋テ秋山書記官赤城東牟婁郡長沖嶋村長ニシテ其式ヲ了シ土国軍艦乗員ブラザーン外一名同行樫野ヲ發シタルハ最早午後六時ヲ過ケリ

夫レヨリ人夫ヲ要シ提灯及篝火ヲ点シテ之ヲ送り又大嶋ヨリハ同様仕度ヲナシテ之ヲ迎ヘタリ

茲ニ一時ノ困難ヲ来シタルハ八重山艦長途次疾病ニ罹リ歩行自由ナラズ故ニ医官并ニ士官属員一名ト小生ハ人足播本清ヒト供ニ看護スル中木野助役ハ迎ノ為メ人足ヲ伴ヒ来タリ而シテ樫野ヨリモ警部巡查并ニ医師人夫ヲ出シ大嶋ヘ担荷シ着シタルハ午後十一時ヲ過キタリ

然ルニ先行セシ一行海軍々医大監ヲ初メ秋山書記官其他隨行官ハ尚村役場ニ在ツテ同艦長ノ来ルヲ待ツ艦長ハ山本重平宅ニ休憩シ夜十二時頃夫々艦員ト供ニ本艦ニ帰ル

同夜士官兵員ノ帰途大嶋ニ於テハ途次灯ヲ点ジテ并行ヲ便ニシ村ニ入りテハ沿道各軒ニ球灯ヲ吊シ村役場ハ軒灯ニ尚門前篝火ヲ点ジ乗船ヲ便ニスル等百事行届キタル云々ニテ士官兵員ニ於テモ満足セシ旨秋山書記官ヨリ予ニ懇詞セラル

埋葬式ニ会セラレシハ

海軍大佐正六位勲四等八重山艦長 三浦 功

海軍軍医大監正六位勲四等 加々美光賢

其他士官四名 水兵二十五名

秋山和歌山県書記官

隨行 本県雇 井上齊 警部補 舟橋義一

東西牟婁郡長 隨行郡吏員

東牟婁郡警察署長 古座分署長

引率各分署巡查

村長以下村吏員

樫野大嶋篤志者

右

同夜其筋ヨリノ電報ニヨレバ土国負傷者ハ八重山艦ニ搭載シ直ニ東京ナル慈恵院ニ入レ療養セシムヘキ旨兩皇后陛下ノ恩召ヲ以テ被仰出候旨宮内省ヨリ達セラレタリト故ニ本艦ハ明朝神戸ニ向ヒ出帆スベキニ付早天本艦ヘ出頭スベキ旨ヲ伝ラル

本日検視済死体ハ 十四人

一人 三輪崎へ

三人 下田原へ

一人 スエヨリ

二十二日 強雨

午前六時秋山書記官ノ一行ト共ニ八重山艦ニ到ル小生ハ前夜人夫賃金等ノ件ニ付主計課ニ用ヲナス午前八時夫々別ヲ告ケテ退艦直ニ本艦ハ神戸ニ向ヒ出帆セリ

秋山書記官ノ一行尚大嶋ニ滞在土耳其軍艦遭難実況書ヲ認ム

西牟婁郡警察署長宮崎正知大嶋ニ出張ス尋テ東牟婁警察署長同古座分署長等書記官ノ旅宿ニ来リ夫々用ヲ了シ西牟婁郡

警察署長ハ任所ニ新宮^{こさ}古座署長ハ樫野出張ニ帰ル

本日費用概算ヲ調査スル為メ樫野出張ノ菱垣書記ノ帰省ヲ命ス尋テ直夫ヲ馳セ齋藤区長ヨリ精算書ヲ徴ス

同夜大嶋医師川口三十郎伊達一郎ノ二氏ハ負傷者ノ治療ノ顛末及右ニ関シタル施術料及藥其他ノ物品ハ渾テ寄付セン
事ヲ書記官へ上申セリ

本日検死済ナシ

同日太地村海岸へ漂着死体 十四名

二十三日 晴天

午前第九時秋山書記官ノ一行及赤城郡長牧野雇員等夫々帰在ノ為メ申本ニ航

右出発ニ際シテ書記官ヨリ将来ノ処置振等左ノ通り命令セラル

- 一 海岸ニ漂着シアル船滓ハ其儘置ク事
- 一 死屍ハ可成搜索埋没スルヲ要シ現ニ死屍ノ顯レ出ルモノハ其儘存セザル様勉ムベシト 雖 モ特ニ多額ノ費用ヲ以テ搜索スルニ及バス
- 一 皇族ヲスマンパシヤ殿下ノ御遺骸ハ仮令數十里ノ外ニ現出スルモ可成本墓地ニ取寄セ埋葬スベシ

秋山書記官へ本日左ノ篤志者ヲ上申セリ

- 一 大嶋医師松下秀外二名ヨリ治療及ビ藥価之ニ使用セシ物品等 渾 テ寄付スル事
- 一 神田清右エ門ヨリ煙草二十本入二百七十個贈進ノ事
- 一 大嶋村大字大嶋須江樫野ヨリ住民一戸一工ノ労役寄付ノ事

午後二時菱垣書記官同行樫野事務所ニ戻リ直ニ実地ヲ視察スルニ本日ハ一時二死体三十余艦底沈没ノ場所ヨリ浮上リタリ
故ニ死屍ノ埋葬スルモノ甚ダ多シ右村長不在中ハ渾テ山本橋爪ニ氏専ラ之ニ従事ス

本日、検死セシ死体ハ三十一人 内五人広浦

二十四日 降雨烈風

本日ハ海上激波ヲ起シ到底小舟ヲ出ス克ハス故ニ海岸ニ漂着スル死屍ノ取揚方ニ専ラ従事セシム而シテ本日ヨリハ予
テ秋山書記官へ上申セシ寄付人夫各大字ヨリ出夫セシモノヲシテ労役ニ服セシムル事トス故ニ不時節柄ナルヲ以テ昼食料
トシテ出夫一名白米四合ヲ各大字区長ニ於テ一時繰替へ給与スル事ト定ム

本日検死済 二十五人 内七人広浦埋メ 十人アリキ

二十五日 晴天

海上稍穏静ナルヲ以テ小舟三艘ヲ要シ海面ヲ調査ニ従事セシム而シテ本艦底沈没ノケ所ヲ搜ルモ未タ詳明スル克ハズ
各大字ヨリ出夫スル人足ハ夫々組ヲ分テ死屍引曳埋葬地ノ構成等ニ従事セシム

同日午前第八時清水警部同道艦体見分ノ為メ灯台下ニ出張セントセシニ巡查森本角三郎同岩橋富次郎ノ二氏ハ金銀貨ヲ
携へ来ルニ会ス其由ヲ聞クニ本艦滓片漂着場字サブ風ト称スル処へ到リシニ茲ニ金庫ノ破碎セシモノカ白金巾袋ノ散在
スルニヨリ取揚ケタレニ金銀貨ノ混入シアルニヨリ直ニ引揚ケ持帰りタリト因テ清水警部及小生巡查等四名立会ノ上取調
タルニ金銀貨及物品等アリ直ニ其旨坂本郡書記へ申合セテ引渡ヲ受け保管セリ其種類即チ左ノ如シ

記

- 一 金貨 大 百八十八個
- 一 同 中 二十八個
- 一 同 小 二十四個
- 一 蔴形穴明キ金貨 大 八個
- 一 同 小 三十六個
- 一 銀貨 一円形 二百三十四枚
- 一 同 五十銭形 四枚
- 一 同 二十銭形 四十五枚
- 一 同 十銭形 十八枚
- 一 同 五銭形 十九枚
- 一 内国白銅貨 五銭 十二枚

- 一 同 二錢銅貨 三枚
- 一 外国銅貨一錢形 十五枚
- 一 同 大形 五個
- 一 同 小形 四十一枚
- 一 黒革狼口 一個
- 但シ大ノ金貨一個金ノ紫石入指環一個銀象形一個入ル
- 一 唐糸編袋 一個
- 但シ一個鍵二個添フ

右ハ巡查森本角三郎外一名十揚ケノ分

- 一 銀貨 一円形 四個
- 一 同 五十錢形 一個
- 一 同 二十錢形 一個

右ハ巡查芦原亀三郎外一名役場員山本重一郎同立会ノ上海岸ニ於テ拾ヒ得タル分

以上夫々保管方東牟婁郡警察署長ヨリ引渡ニ付キ檜野灯台原野ニ於テ之ヲ受ク

本日夜係官一同相会シ互ニ勞ヲ慰ス

午後十時大嶋役場ヨリ直夫来ル刺病三名発病セリト聞キ直チニ直夫ト供ニ大島ニ帰省セシハ十一時ヲ過ク

本日検死済死体 三十人

二十六日 晴天海上静

午前第六時大島出夫ノ内小舟一艘ヲ仕立テ字金山海岸ニ漂着スル死体ヲ檜野埋葬地ニ回漕セシム

同時大島小山泰助来リ長崎県水潜師ノ希望ニヨリ土国軍艦沈没ノ実況視察ノ義ヲ申出タルニヨリ直チニ同舟ニ乗込檜野ニ来リタルハ午前第九時ナリ

夫ヨリ上陸現場ヲ視ルニ充分水潜シ得ルヲ以テ則チ清水小林ノ両署長へ臨検ヲ請ハントセシニ既ニ大島ニ引取タルヲ以テ巡查木村実ヲ臨検セシメ夫夫ヲ増シテ現場ニ至リ海底ヲ調査セシメシニ舟体ヲ存スルナク唯各所ニ大砲及銃砲彈丸等各所放散乱死屍ハ僅ニ六名アリ然レモ皆舟滓等ノ圧セラレタルハ到底取揚ルヲ得スト而シテ右搜索ノ際揚陸セシ物品ハ左ノ如シ

- 一 葵紋付銀サヤ日本刀 一振
- 一 サヤナシ 同 一振
- 一 士官用サーベル 八個
- 一 兵士用サーベル 二個
- 一 ピストル 二個
- 一 銀燭台 一個
- 一 銃炮 二挺
- 一 双眼鏡 二個
- 一 据付眼鏡 一個
- 一 花瓶 一個
- 一 金モール 鈔 二個
- 一 寒暖計 一個
- 一 メートル計 一個

右巡查木村実同小山某ト役場員立会ノ上調査シ之ヲ村役場ニ保管ス其水潜師ハ左ノ如シ

長崎県長崎市桶屋町三十六番地 水潜師 平井好太郎

右舟乗組水夫三輪崎村 岩崎栄七外三名

引受宿 大嶋村 小山泰助

右終業ノ上坂本郡書記ト申合二十七日午前中更ニ他ノニ三ヶ所ヲ搜索セシムル事トス

本日午前十時東牟婁郡警察署長及古座分署長巡查森本角三郎等夫々帰任左ノ巡查ヲシテ当分当地取締ヲナス

木村実
小山啓次郎
岩崎富二郎

午後第五時坂本郡書記ハ大島迄引取レリ

同時木野助役ヨリ金銀貨領受証受理之ヲ警部ニ差出サスル旨写ヲ以テ照会越タルヲ以テ兎照ノ処残包金貨一個相違ノ
廉アルニヨリ直チニ役場及古座分署在清水警部森本巡查ヘ直夫ヲ馳セテ照会セシニ同夜午前一時森本巡查来リ取調タル
同人手帳ニモ明瞭ナルニヨリ因テ小生申出ノ如ク訂正ヲ本県警部長ヘ申告セリ

同夜大字樫野人民一同ニ会土国軍艦ニ係ル物品保安ノ件及ヒ将来競テ義心ヲ起シ供ニ戒慎取締方注意セシム

本日検死済 十二人 新墓地 内一人 大シマ金山ヨリ回送ス

二十七日 晴天海上静

午前第五時水潜器械舟当地ヘ着ス因テ橋爪仁蔵及小山巡查岩谷源兵衛人夫三名ヲ乗組セ現場ヲ搜索セシム
森本巡查ハ新宮ニ帰ル

本日樫野医師小林建斎ヨリ治療併薬価ハ 渾^{ふるっ}テ寄付セン事ヲ要シ知事宛書面ヲ呈ス

新設埋葬地ハ大字人民ヨリ頭立ノ意見ニ任放シ^{なるべく}可成寄付ヲ望ムニアリ

フラサーン外一名ニ係ル十八日以降二十日迄宿泊料ハ齋藤半之右ヱ門ヨリ無料寄付申出タリ

寺院学校ヲ使用セン借家料ハ皆以テ関係者ノ寄フト定ム

本日ヲ以テ死体埋葬等西向住民ノ受負ヲ止ム因テ受負中埋没ノ数ヲ照査スルニ

十九日 四十八人 二十日 二十五人 二十一日 十四人

二十三日 三十三人 二十四日 三十一人 二十五日 三十人

二十六日 十二人 二十七日 一人

斗 百九十二人 但シスエ一人共

右勘定支払ハ齋藤区長ヘ托ス

午前十一時水潜師業ヲ止ム本日ハ激波為充分海底ヲ搜リ得難クニ付同時業ヲ止ムルニアリ其序ニ揚ケタル物品ハ左ノ
如シ

一 銅ホート 三本 一 エンフ網

右

前日来揚陸セシ物品ハ夫々^{それぞれ}目録ヲ付シテ水潜師舟ヘ送達ス

午後一時一旦事務所ヲ引払ヒ沖村長以下橋爪山本等大島ニ帰任ス菱垣書記ハ残務取締シテタ景迄残ル

明日ヨリハ樫野人夫十名ヲ要シ海岸漂着ノ金属物品ヲ揚陸セシメ尋テ埋葬地構成ノ事ニ従事セシムル事等区長ヘ嘱托セ
リ

午後第三時雇員橋爪山本両氏ト供ニ大島ニ帰ル

菱垣書記ハ本日出夫ノ人夫ヲ引払ヒタル上帰任ノ事ヲ命ス残務ニ従事セシム

坂本郡書記ハ帰在ノ為メ串本ニ航シタリ

二十八日 晴天

本日ハ村祭ニ付一日休業ス

二十九日 晴天

菱垣書記樫野区ヘ出張ノ義申出タルニヨリ諸事取締向ヲ示シタリ

郡長ニ対シ舟滓ノ内ニ圧死スル死体四個ヲ発見セシニ付取出シノ件処分稟請ス

主任書記菱垣ハ出張ニ会シ刺病ヲ発シ為メニ出張スル克ハス因テ其旨^{その}区長ヲ通ジ暫ク代務ヲ命ス

三十日 晴天

本日大島寄付人夫々山本多吉郎取締ノ為メ出張セシム

齋藤区長ヘ諸事不取締ナキ様内示シ併セテ川島巡查ノ帰省ヲ促ス

本日検視セシ死体 四人

内三人ハ須江ニ埋葬ス

内一人ハカシノ本埋葬地へ

須江浦人夫ハ死体取片付ノ為メ使用シ墓地構築所へハ出張セス

本日日本水難救済会事務員及県属等来リ救難所本地へ設置ノ事ヲ協議セリ実地点検ノ上串本ニ航ス

十月一日 晴天

本日ハ出夫ヲ見合セリ天候晴雨定マラサレハナリ

午前第九時こさ古座分署長来リ水潜器使用ノ件ヲ協議ス直チニ坂本郡書記へ宛その其旨ヲ通ジ更生ヲ請求ス

死 体 埋 葬 調

月 日	檜 野 埋 没	月 日	他 所 埋 没
十七日	四人	十七日	
十八日	四人	十八日	
十九日	五十九人 内四人ヒロ浦	十九日	五人 但下田原
二十日	十八人	二十日	十一人 五人田原 一人串本 五人田原
二十一日	十四人	二十一日	四人 一人三輪崎 三人田原
二十二日	0	二十二日	十四人 但シ太地
二十三日	三十二人 内一人ヒロ浦		
二十四日	二十五人	二十四日	一人 須江
二十五日	三十人		
二十六日	十二人		
二十七日	一人		
斗	百九十九人		
	五人名入夫數 百九十一名		
	又一名 合計百九十二名		
三十日	一人 旧墓地ニ埋	三十日	二人 須江 三人 通夜島ニ
十月六日	一人 アノキ谷新墓地へ		
十月七日	十人 舟中ヨリ引 出シ新墓地へ		
十月八日			

領 取 書

記

- | | |
|-------------|----|
| 一 葵紋付銀サヤ日本刀 | 一振 |
| 一 サヤナシ 同 | 一振 |
| 一 士官用サーベル | 八個 |
| 一 兵士用サーベル | 二個 |
| 一 ピストル | 二個 |
| 一 銀燭台 | 一個 |
| 一 銃砲 | 二挺 |
| 一 双眼鏡 | 二個 |
| 一 据付眼鏡 | 一個 |

- | | |
|-----------------------------|----|
| 一 花瓶 | 一個 |
| 一 金モール 銚 <small>かざり</small> | 二個 |
| 一 寒暖計 | 一個 |
| 一 メートル計 | 一個 |
| 一 エンボ綱 | 一括 |

右ハ土国軍艦ニ属スル
 明治二十三年九月二十六日

東牟婁郡大島村長 沖 周あまね

古座分署長小林征一殿こざ

記

- | | |
|-----------------|------|
| 一 鉄ホート針 | 三十九括 |
| 一 銅ホート外ニ延板ノ [] | 二括 |

右ハ土国軍艦ニ属スル漂着品正ニ保管候也
 明治二十三年九月二十七日

村長名

古座分署長小林征一殿こざ

土艦遭難ニ係ル日記 榎野区長報告

九月二十八日 両日ハ三字トモ出夫ナシ随テ事ノ記スペキナシ

同 二十九日

同 三十日 午前第八時大字須江ヨリ人夫十六人着同時ニ須江区事務取扱所ヨリ其属嶋ナル通夜嶋ニ死体二人漂着シアル旨届ケ来ル依テ只今着到ノ人夫ハ右死体取片付トシテ直ニ歸字セシメ小生ハ檢視トシテ巡查小山啓二郎氏同行該地へ出張夫々手順ヲ了シテ帰省夫ヨリ現場人夫見廻リトシテ直ニ新埋葬地へ到リニ当地小字足ノ浦海岸ニ頸骨ヨリ上ミ断チ切レテ無キ死体一人漂着シアル旨告ケ来ルニ因テ一人ノ賃金二十五銭ノ定メヲ以テ四名ノ人夫ヲ雇ヒ入レ檢視巡查川嶋犬楠氏同行該海岸へ出張方ノ如ク死体ハ酒樽ニ収メ字上ノ鼻墓地即チ嚮むかキニ埋葬セシ水兵四名ノ墓側ニ葬ル

須江ヨリ寄付セル出夫ハ本日ヲ以テ満員ヲ告グ

午後四時小山巡查ハ須江出張先キヨリ帰ル

十月一日 記事ナシ

十月二日 後五時遭難現場ニ於テ村田銃及袋包一個ヲ十得巡查岩橋富二郎氏立会点檢セシニ在中ノ物品左ノ如シ

記

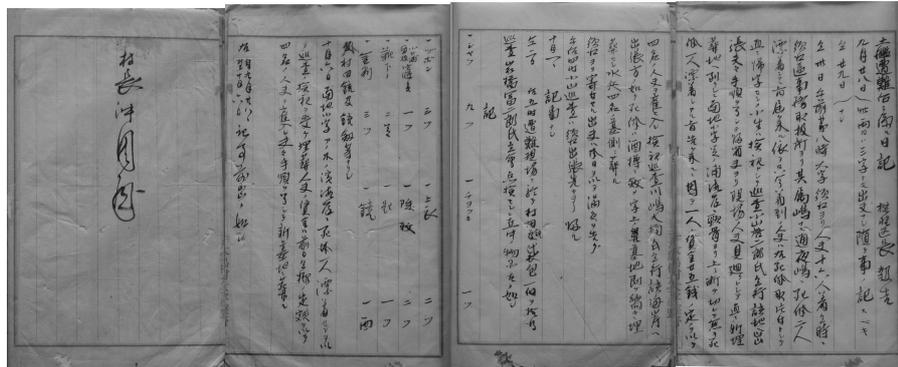
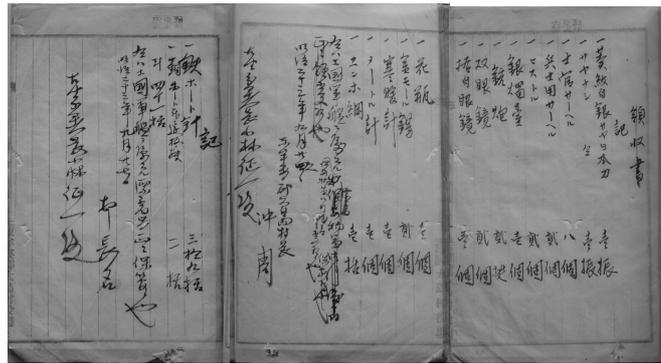
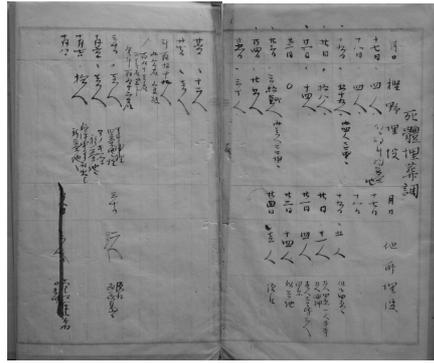
- | | | | |
|----------|----|--------|----|
| 一 シャツ | 九ツ | 一 チヨッキ | 一ツ |
| 一 ツボン | 三ツ | 一 上衣 | 二ツ |
| 一 小蒲団様寝具 | 一ツ | 一 珠数 | 二ツ |
| 一 靴下 | 二足 | 一 匙 | 一ツ |
| 一 金刺 | 三ツ | 一 鏡 | 一面 |

外ニ村田銃及銃剣等ナリシ

十月六日 当地小字アノ木ノ浜海岸ニ死体一人漂着セシヲ以テ巡查ノ檢視ヲ受ケ埋葬人夫ノ賃金ハ前日同様ノ定額ヲ以テ四名ノ人夫雇入レ夫々手順ヲ了シテ新墓地ニ葬ル

右自九月二十八日至十月六日 記事前出ノ如シ

村長 沖 周 殿あまね



写真(付)4-4 (上)「死体埋葬調」、(中)「領収書」、(下)「土艦遭難二係ル日記 榎野区長報告」(上記3点は『沖日記』巻末に付せられているもの)【トルコ記念館蔵】

付5 和歌山県知事から海軍大臣宛報告書（校訂版・写真版）

（旧漢字は常用漢字に改め、
難読語にはルビを振った）

トルコ 土耳其軍艦遭難ニ付救護ノ顛末具状

土耳其軍艦遭難ニ付救護ノ概況ハ逐時及上申置候処今般出張秋山書記官一ト先帰庁セシニ依リ其取扱ノ顛末及遭難ノ模様等概略左ニ致具陳候

- 一、該土耳其軍艦アルトグロー号ハ同国皇族「オスマンパシヤ」殿下ヲ始メ総員六百五十名乗組明治二十三年九月十五日横浜港解纜神戸港ニ向ケ航行中同十六日午後八時過和歌山県下東牟婁郡樫野崎灯明台ヲ距ルニ里許ノ処ニ於テ機関ニ損所ヲ生シ運転自由ヲ失ヒ偶風波猛烈為ニ該灯明台下南西ノ方ニ吹寄ラレ危険ニ迫リタルヨリ一挺ノ錨ヲ投スルヤ否ヤ艦体回転シ艦尾忽チ岩礁ニ衝突シ全艦瞬時に破壊沈没セリ其時一等艦長「アリペー」ハ「ブリッジ」ノ上ニ在テ指揮シ「パシヤ」殿下ハ甲板上 艦 辺ノ一室ニ在マセシニ急遽ノ際救援ノ手段ナク蓋互ニ其実況ヲ知ルニ遑 ナキ程ナリシト時ニ午後九時半頃ナリト云以上ノ概況ハ上陸遭難者ヨリ不十分ナル通弁ニ依リ聞知ル所ト村吏等ノ説話トニ因ル詳細ノ義ハ其筋ヨリ上申可相成ニ付茲ニ省略ス
- 一、樫野崎灯明台員ノ説ク所ニ據レハ技手瀧澤区浄ハ乃美権之尉ト交代時限に際シ共ニ台上ニ在リシニ十六日午後十時過一名ノ外国人負傷裸体ノ儘闖入シ之ヲ誰何スルニ言語通セス且何国人タルヲ識別シ得ス又其船種ノ何ニ属スルヤモ知ルヲ得ス故ニ直ニ洋船帆装式表ヲ示シタルニ彼「バーク」形船ヲ指斥スルヲ以テ其帆走商船ナリト信シ何分其破船罹災者タルヲ推知スルヲ以テ応分ノ保護ヲ与ヘタル中更ニ同様ノ者九名闖入セシニ付同台備付ノ単膏豚脂等ヲ与ヘ包帯ヲ施ス等相当救護シタル時 恰モ暁天ニ及ヒ爾後漸次ニ遭難者上陸シ遂ニ総員六十九名ニ至リ孰レモ皆其身体大小傷セルヲ以テ夫々手当ヲナシ台員私有ノ衣服ヲ給シ尚官物「シャツ」七枚及ヒ臥床覆一枚ヲ以テ被服ニ代ヘシメ而シテ之ヲ大島村大字樫野区長齋藤半之右門ニ急報シタリト
- 一、齋藤半之右門ハ右急報ニ接スルヤ即一面同村大字大島ニアル（距離山路二里余）村長沖周ニ報告シ一面須江ニ報シ大島村長ハ之ヲ和歌山県庁及其所轄ナル古座警察分署ニ速報セリ随テ樫野大島須江三字ノ人民追々來集シ村吏ハ古座警察分署長小林征一及巡查ト協力奔走扶持シ飲食其他供給ヲ欠カサラシメ先ツ負傷者ヲ樫野小学校及大龍寺内ニ移置セリ此時東牟婁郡警察署長清水広治及同郡書記ト共ニ徹夜急行赴援シ夫々看護ニ着手シ続キテ東牟婁郡長赤城維羊モ到着シ共ニ諸事ヲ取扱ヘリ先是汽船防長丸ハ風波ヲ避ケテ大島港ニ寄繫中破船アルコトヲ聞知スルヤ船長直ニ樫野崎ニ踵リ遭難ノ事蹟ヲ認メ其説話ニ因リ始メテ土耳其軍艦ニシテ殊ニ「オスマンパシヤ」殿下ノ乗組マセラルコトヲ知リシ驚キテ其旨ヲ諸方ニ伝報セリト云
- 一、該急報ノ和歌山県庁ニ達セシハ十八日午後十二時ニアリ（此間距離四十四里余道路嶮阻加ルニ風雨ノ為メ諸川出水シ又西牟婁郡田邊以南ハ電信線架設中未通ナルニ由リ如此廻着セリ）直ニ書記官及ヒ警部補舟橋義一其他ヲ派遣セシメ十九日夜ヲ徹シテ日高郡南部ニ及ヒ翌朝辛クシテ西牟婁郡田邊ニ到リタルモ其以南ハ山海殊ニ嶮急到スヘカラサル実況ナルニ偶汽船神田丸ノ入港スルニ会ヒ之ヲ儼ヒ急進シテ二十日大島港ニ達シ諸般ノ手配ヲ為セリ尚引続キテ西牟婁郡長秋山徳隣同郡書記等モ到着セリ
- 一、遭難負傷者ノ数多ク且樫野ハ僅々五十余戸ノ避村ナルカ為ノ充分ノ保護ヲ尽シ得サルヲ以テ十七日午後四時頃負傷者十八名ヲ大字大島蓮生寺ニ移シ翌十八日午前更ニ四十五名ヲ同寺ニ移シ十九日午前ニ残り二名ヲモ移置セリ而シテ漸次海面ヨリ引揚ケ又ハ漂着セル死体ノ認識ハ該国人ニアラサレハ為シ能ハサルニ付宣教師「ブラサーン」及水兵「ハイリン」ハ之ヲ樫野ニ留メ置ケリ是ニ於テ傷者救護ノ事ハ大島ニ於テシ現場取纏メノ事ハ樫野及ヒ須江ニ於テスルコトト定ム其遭難者中士官「ハイダール」楽長「イスマイル」ハ救護上打合ノ為メ神戸ニ行カント欲スルニ依リ十八日午前大島繫泊ノ防長丸ニ乗組マセ大島村役場員及巡查ヲシテ護送セシメ兵庫県ヘ引渡セリ
- 一、二十日午前七時独逸軍艦「ウオルフ」号大島港ニ來リ兵庫県外事課員長野桂太郎乗組アリ赤城東牟婁郡長就キテ其來意ヲ叩クニ該遭難者ノ依頼ニ依リ神戸ニ迎ヒ取ルカ為ナル旨ヲ答ヘタルヲ以テ諸般商議ノ末遂ニ負傷者六十五名ヲ該艦ニ移載シ且同艦ハ樫野崎ニ回航シ死者ノ埋葬式ヲ行ハントシ艦既ニ同所ニ近ツキモ風波險惡ノ為ニ其事ヲ果サス故ニ樫野ニ在ル宣教師「ブラサーン」外一名ヲ移載シ得スシテ午後一時大島港ヲ発シ神戸ニ向ヘリ
- 一、十七日以来数十艘ノ舟ヲ斃シ死屍ノ搜索ニ從事セシムルモ本艦沈没ノ場所ハ現ニ陸地ヲ距ルニ二三間許眼前ニ指点ス可キカ如キモ近岸ハ皆断崖絶壁該所ハ巖礁森立ノ中ニ在リテ平常ト雖トモ容易ニ舟ヲ近ツクヘカラサルニ況

シテ連日ノ風波特ニ甚シキニ於テヲヤ然ルモ尚艱辛ヲ嘗メ危険ヲ犯シテ探求ニ努力セルニ其二十一日ニ至ルマテ五日間ニ所々ニテ死屍ヲ海面ヨリ收取セシモノ実ニ一百二十一ニシテ内檜野崎ニテ收取セシモノ九十有七ニシテ八重山艦ノ航海中收取ニ係ルモノトス此内艦長「アリベール」軍医某主計官某ノ遺体アリ其最も早く得ル所ノ四人ハ檜野共葬墓地ニ埋メタルモ爾後陸續発見到底該地ニ容ルヘカラサル因リ竟ニ同大字公有地即灯明台ヲ距ル西南一丁許ノ地所ヲトシ特ニ該遭難者ノ埋葬地ト為セリ

- 一、二十一日午前御派遣ノ軍艦八重山艦大島港ニ到着シ艦長三浦大佐加賀美軍医大監土井大主計石原大軍医朽内少尉及鈴木大尉ハ水兵一小隊ヲ率ヒ秋山書記官之ヲ案内シテ遭難ノ実地ヲ巡視シ且仮埋葬地ニ於テ葬儀ヲ執行シ残留ノ遭難者二名ニ衣食ヲ給シテ厚ク之ヲ慰問セシ後夜中猛雨を衝キ陸路大島港ニ帰艦セリ時ニ午後十二時ナリ
- 一、遭難者埋葬地ハ灯明台ヲ距ル遠カラス位置北西ニ面シ高燥且開豁ナリ海面ヨリ一望シテ其墳墓ナルヲ認知スルヲ得ヘシ埋葬ノ位列ハ其中央ニ仮ニ「パシヤ」殿下ノ位置ヲ設ケ右方ニ艦長左方ニ軍医他ハ從ヒテ左右後ノ三面ヲ擁シテ埋藏シ其士官以上ハ各木標ヲ建テ官姓名ヲ書シ且該地ハ村里ニ遠ク自カラ汚穢ノ境ニアラサルモ新ニ其墓上ニハ清浄ナル土ヲ盛ルコト各凡ニ尺許特ニ殿下ノ位置ト仮定スル所ハ別ニ新土ヲ以テ築立恰モ丘陵ノ如ク為スコトトシ死屍ハ拳テ堅牢ナル長方形ノ棺函ニ斂ムル等専ラ注意ヲ為セリ又其埋葬地ハ広袤十間四面余地ヲ存シ該所ニ棺函ヲ備ヘ取得ニ隨ヒ直ニ瘞埋シ得ルノ設ヲ為セリ尚ホ沿海各地ニ其死体ヲ收取セシハ東牟婁郡太地村二十二田原村ニ五下里村ニ四串本村三輪崎村ニ各一アリ（前叙收取総数ノ内ニ属ス）皆其收取ノ地ニ於テ仮埋葬セリ只憾ム所ハ未タ殿下ノ御遺骸ノ所在ヲ発見シ得サルニ存リ
- 一、残留遭難者宣教師「ブラザー」外一名ハ曇者独逸艦ニ搭載セシ時其士官ノ囑托セシ趣ニ依リ秋山書記官ヨリ三浦艦長ニ謀リ神戸港ニ護送スルニ決シ乃チ艦長ニ引渡シ同艦ハ翌二十二日午前八時大島ヲ拔錨シ神戸ニ回航セリ
- 一、其逐次ニ引揚ケタル死屍ハ炎暑ノ候数日間激波ニ簸蕩セラルルニ由リ腐爛殊ニ甚シク中ニハ被服セルモアレトモ裸体ナルヲ多シトス蓋避難ニ便シ自ラ脱却セルナラン故ニ其容貌ヲ識別シ誰某ナルヲ知ルヲ得難キ程ナレハ今後引揚又ハ漂着スル者ハ尚ホ更ニ一層ノ惨況ヲ呈スヘシ又破碎ノ艦材ハ近旁海崖各所ニ打揚ケ堆積シテ山ノ如クナルモ其木片一モ完全ノモノアルナク帆楹ノ如キモ幾個ニ断截セラレテ長三間許ヲ出テス他ハ推シテ知ルヘシ其悲惨ノ状実ニ筆舌ニ盡シ難シ
- 一、此異変ニ当リ大島村則大字大島檜野崎須江ノ人民ハ頗ル愛憐ノ情義ヲ表ハシ傷者ノ救護死者ノ探求ニ論ナク其埋葬等ニ至ルマテ数百ノ人夫ヲ出シ奔走努力令セスシテ各其事ニ服シ就中連日風雨蒸熱ノ際身体ノ沾湿疲憊オモ厭ハス暁天ヨリ夜陰ニ及フマテ各勞働シテ敢テ辛苦トセス殊ニ其夜埋葬式ヲ行ヒタル時ノ如キ偶風雨甚シク且咫尺ヲ弁セサル暗夜ニ及ヒシニ村民ハ波止場ニ松明ヲ燒キ且ツ軍人迎送ノ為メ提灯等ヲ出スコト其数枚挙ニ遑アラズ実ニ僻境ニ稀ナル殊觀ヲ呈セリ加之傷者療養ニ從事セシ醫師ハ奮テ之ニ膺リ其治療ヲ義務トシ以テ日夜心力ヲ盡セシ為メニ傷者ニシテ上陸後一名ノ失命者ナキハ村長沖周以下村民ノ勞効多ニ居ルニ外ナラス
- 一、前叙仮埋葬ヲ了ヘ且残留遭難者ハ八重山艦長ヘ引渡シ濟ニ付一旦書記官郡長以下ハ二十四日歸庁シ爾後ハ警部郡吏ヲシテ諸事厚ク注意取扱ハシメリ

右出張秋山書記官復命ノ趣ニ依リ其概略具状ノ為該遭難地及埋葬地ノ大略ヲ描キタル図面相添此段上申候也
明治二十三年九月二十五日 和歌山県知事 石井忠亮

海軍大臣子爵 樺山資紀 殿

<付図：遭難現場 大島の図（写真版を参照のこと）>

1830 0820

各地に其死骸ヲ收取セシ、東牟婁郡太地村ニ十二田原村ニ五下里村ニ四岸木村ニ輪善村ニ各一ツリ(前叙收取總數ノ内ニ屬シ)皆其收取ノ地ニ於テ假埋葬セリ、只感ム所ハ未タ殿下ノ御遺骸ノ所在ヲ發見シ得カルニ在リ

一 残留遭難者ニ宣教師ヲシテ外一名ハ星叢者獨逸艦ニ搭載セシ時其士官ノ囑托ニ依リ、依リ秋山書記官ヨリ三浦艦長ニ謀リ神戶港ニ護送スルニ決シ、乃チ艦長引渡シ同艦ハ翌二十日午前八時大島ヲ抜錨シ、神戶ニ回航セリ

一 其逐次引揚タル死屍ハ其着ノ候數日間

0830 0831

其墳墓ナルヲ認知スルヲ得ヘシ埋葬ノ位列ハ其中央ニ假ニシテ殿下ノ位置ヲ設ケ、右方ニ艦長左方ニ軍醫他ノ從ヒテ左右後ノ三面ヲ擁シテ埋葬シ、其士官以上ハ各木標ヲ建テ官姓名ヲ書シ、且詠地ノ村里ニ速ク自カニ汚穢ノ境ニテアラカレテ新ニ其墓上ニ清淨ナル土ヲ盛ルルト各凡ニ尺許特ニ殿下ノ位置ト假定スル所ハ別ニ新土ヲ以テ築立給ヒ、左方ノ如ク為スト、レ死屍ヲ擧テ堅牢ナル長方形ノ棺函ニ斂ムル等專ニ注意ヲ為セリ、又其埋葬地ハ廣袤十間四面餘ヲハ尚逐次埋藏スヘキ餘地ニ存シ、該所ニ棺函ヲ備ヘ、收得ニ隨ヒ直ニ瘞埋シ得ルヲ設ケ、為セリ、尚ホ沿

0820 0832

一 地所ヲトシ、特ニ欲遭難者ノ埋葬地ト為セリ

一 二十日午前御派遣ノ軍艦八重山艦大島港ニ到着シ、艦長三浦大佐加賀美軍醫大監土井大主計石原大軍醫枋内少尉及鈴木大尉ハ水兵一小隊ヲ率テ秋山書記官之ヲ案内シテ遭難ノ實地ヲ巡視シ、且假埋葬地ニ於テ葬儀ヲ執行シ、残留ノ遭難者二名ニ衣食ヲ給シテ厚ク之ヲ慰問セリ、後夜中猛雨ヲ衝キ陸路大島港ニ帰艦セリ、時ニ午後十二時ナリ

一 遭難者埋葬地ハ燈明臺ヲ距ル遠カラズ、位地北西ニ面シ、高燥且閑静ナリ、海軍ヨリ一覽シ

0830 90

ハ村長沖浦以下村民ノ勞効多ク、居ルニ外テラ、又ハ叙假埋葬ヲ了ヘ、且残留遭難者ハ八重山艦長引渡シ、濟ニ付一旦書記官那長以下、廿四日歸艦シ、爾後ハ警部郡吏ヲシテ諸事厚ク注意取扱ハレリ

右出張秋山書記官復命、類ニ依リ其概略具狀ノ為メ、詔遭難地及埋葬地ノ大略ヲ描キタル圖面相添、此段上申候也

明治三年九月廿四日 和歌山縣知事石井忠亮

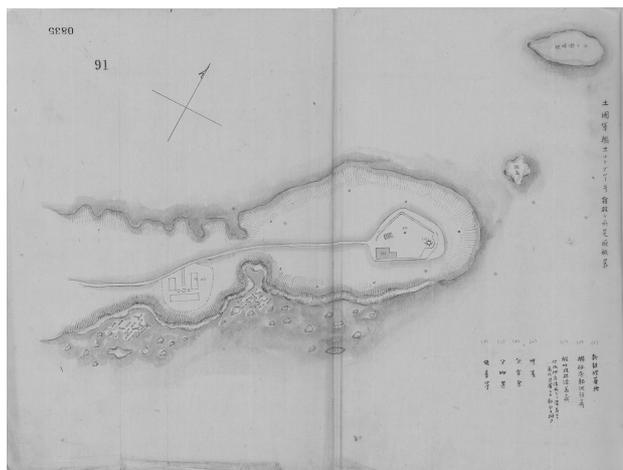
海軍大臣于萬祥山濱紀殿

0830 91

一 救護死者ノ探求ニ論ヲテ、其埋葬等ニ至ルニテ數百ノ人夫ヲ出シ、奔走努力冷セシニテ、各其事ニ服シ、就中連日風雨暴熱ノ際、身軀ヲ治濕疲憊ヲ受、厭ハス、晚天ヨリ夜陰ニ及、イテ各溺斃シテ散テ、辛苦トセシ、殊ニ其假埋葬式ヲ行ヒタル時、如キ偶風雨甚レク、且咫尺ヲ辨セザル暗夜ニ及、レ、村民ハ波止場ニ松明ヲ燒キ、且軍人迎送ノ為メ、提燈等ヲ出シ、ト其數枚舉ニ遣テ、又實ニ僻境ニ稀ナル殊觀ヲ呈セリ、加之傷者療養ニ從事セシ、醫師ハ奮テ之ニ膺リ、其治療ヲ義務トシ、以テ日夜心カヲ盡セシ、為メニ傷者ノ口上、陸後一名、共命者ナリ

0830 98

一 激浪ニ被敷、溺セラルルニ由リ、腐爛殊ニ甚シク中ニハ破眼セルモノアリ、トモ裸体ナルヲ多シトス、蓋遭難ニ便シ自ヲ脱却セルヲ多シ、故ニ其容貌ヲ識別シ難キナルヲ得、難キ程トシ、ハ今後引揚又ハ漂着スル者ハ尚ホ更ニ一層ノ慘況ヲ呈スヘシ、又破砕ノ艦材ハ近傍海濱各所ニ打揚ク、堆積シテ山ノ如クナリ、其木片ニ至テ、元全クモアルク、帆樫ノ如クモ幾個ニ衝截セラレ、長三間許ヲ出シ、又他ノ推シテ知ルヘシ、其悲惨ノ狀實ニ筆舌ニ盡シ難シ、當リ大島村則大宮大島野須江ノ人民、頗ル受憐、情義表ハシ、傷者



写真(付) 5-2 和歌山県知事からの海軍大臣宛報告書②
 【出典：『海軍公文備考』】

付6 兵庫県知事から内務大臣宛報告書（校訂版・写真版）

（旧漢字は常用漢字に改め、
難読語にはルビを振った）

トルコ 土耳其国軍艦遭難之件ニ付申報

本月十六日和歌山県下東牟婁郡大島ニ於テ土耳其国軍艦エルトグロウル号遭難ノ件ニ付テハ追々電報ヲ以テ及上申置候通ニ有之尤モ遭難者救助方ニ付テハ其筋ヨリ何分ノ御訓令モ可有之ト相心得居候折柄在港独乙国軍艦ウオルフ号不取敢遭難ノ場所ヘ発向遭難者本港ヘ護送致度旨ノ申出有之至極好都合ニ付同意表シ置候処同艦ハ去ル十九日午後四時ヲ以テ遭難地ヘ向ケ出港致候然ル処翌二十日午後一時丹羽式部官来着直ニ郵船会社汽船相模丸ニ搭シ出張ノ手筈ニ相成居候趣予メ宮内省外事課ヨリ通報ノ趣モ有之候得共右独乙軍艦ト途中行違ヒニ相成ヘキ懸念モ有之候間同官ト右辺協議ノ上一時其出港ヲ見合専ラ同艦ノ来着ヲ相待居候処翌二十一日午前六時右遭難者六十五名（外二名ハ前キニ本港ヘ来着又二名ハ漂着ノ死屍取調ノ為メ同島ヘ残レリ）ヲ搭載シ帰港候ニ付不攔丹羽式部官始一同出張尚本県ヨリモ官吏ヲ派シ其日撃スル処ニ標レハ右遭難者ハ概ネ負傷者ニシテ片時モ其俣難擱ヲ以テ直ニ小舸ニ移シ和田岬停留所ヘ上陸セシメ其下等室ヲ病室ニ充テ上等室ヲ以テ治療室トナシ宮内省ヨリ出張ノ侍医始メ赤十字社医員ニ於テ施療漸ク昨日中ニテト通り施術相濟其調査ニ抛レハ遭難者総員六十九名ノ内重傷者十六名軽傷者三十一名健康者二十二名ニシテ亦其重傷者中ニモ自ラ軽重ヨリ其重キモノニ至テハ数日ノ療養ヲ要スヘキモノモ有之尤他日ノ結果ハ予知相成候得共目下ニ在テ危篤ト認メ候程ノ者ハ無ク候然ルニ右遭難者中一人名ハ僅カニ英語ヲ解シ得ルモ談話トテ出来不申就中施療ニ際シテハ言語不通ニテ彼我互ニ不弁ヲ感候処幸ヒ当港内外人雑居地内居住ノ仏蘭西保護ルーメリヤ人エーレビート申者土耳其語其他英独本邦ノ語ニモ通シ至極弁利ノ人物ニ付一時相雇ヒ通弁為致又食事ノ如キハ西洋割烹店ニ命シ同国人ノ慣行ニ適セル物ヲ与フル等諸事可成彼等ノ便宜ヲ謀リ懇切ニ取扱ヒ又健康ナル士官四名ヘハ当ノ衣服ヲ給シ且本人ノ望ニ依リ右レビー方ヘ止宿為致置候処何レモ我保護ノ篤キヲ満足シ頗ル感喜ノ体ニ相見ヘ候將又右独乙軍艦ニ為乗組出張為致候本県官吏ノ報告ニ抛レハ同所ニテ来追々遭難者ノ死屍ヲ発見スルモノ己ニ百有余名ニ及ヒ右同島樫野崎ニ於テ区地ヲトシ仮埋葬地トシ何レモ之レニ埋却シ尚村民等ハ拳テ死屍ノ搜索ニ従事致居候由ニ候得共同艦ノ解纜迄ハ来夕オスマンパシヤノ死体ハ発見ニ至ラサリシ由実ニ今回村吏ヲ始メ村民ノ救護懇到ナルハ遭難者モ頗ル喜悅居候趣ニ相聞候此段概略ノ顛末及申報候也

明治二十三年九月二十三日

兵庫県知事 林 董

内務大臣伯爵 西郷従道 殿

追テ本文大嶋村ヘ居残タル遭難者二名ハ昨二十二日午後三時三十分八重山艦ニ搭シ来着ニ付他ノ遭難者一同和田岬停留所ヘ差置キ相当ノ保護相加ヘ置候又遭難者中溺死ノ人員ハ午後ノ取調ニ抛レハ惣員五百二名ニシテ之レニ生存者六十九名ヲ加フルトキハ惣乗組人員五百七十一名ト相成生存者中士官等上官ノ姓名ハ別記ノ通ニ有之候此段副申候也

土国 士官姓名

イスメール、エッフエンデー	楽隊長
ヒーデル、エッフエンデー	尉官
マハメッド、アリー、ベー	機関士
アリーフ、エッフエンデー	機関士
マスタファ、エッフエンデー	二等主計官
アリ、エッフエンデー	僧侶

付7 八重山艦長から海軍省宛報告書（校訂版・写真版）

（旧漢字は常用漢字に改め、
難読語にはルビを振った）

九月二十日横須賀出航後遠州沖ニ於テ非常ノ暴風ニ遭遇シ大ニ困難ヲ極ムルト雖モ前途ヲ急クヲ以テ巴マス進航ス二十一日午前八時三十分大嶋樫野崎ヲ距ル東方大約七海里ノ所ニ土耳其人ノ死体漂流スルヲ発見シ直ニ之ヲ引揚ケタル右ノ手首ニ仍[□]袖ノ残片ヲ有セリ則チ之ヲ搭載シ大島ニ航進シ午前十一時投錨ス斯ニ於テ上陸シ郡長村長ノ言フ所ヲ聞クニ左ノ如シ

生死人員 土耳其人中万死ノ間ニ一生ヲ得タルモノハ六十九人ニシテ内士官一名楽長一名ハ神戸ニ先發シ六十五人ハ独逸軍艦ニ乗組前日午後一時大島ヲ發して神戸ニ赴キ他ノ二名（其一人ハ宣教師ノ如キモノニシテ一人ハ卒ナリ）ハ独逸軍艦ノ發艦期ニ後レテ樫野崎ニ残留シ専ラ死体ノ検査ニ従事シ居レリ又生存者六十九人中死傷者五十三名ニシテ重傷者ハ六名トシ他ハ輕傷ニシテ健全ナル者ハ少数ニ過キス

土耳其軍艦遭難ノ時刻 土耳其軍艦ノ難破ニ罹リタルハ土耳其人ノ云フ所ニ依レハ午後三時半ナリ然レトモ土国ハ時刻歐洲一般ニ用フル所ト同シカラス土耳其ノ三時半ハ英國ノ九時半ト云フヲ以テ之ヲ見レハ遭難時刻ハ午後九時半ナルコト推シテ知ルヘキナリ

遭難ノ原因及模様 土耳其人ノ云フ所ニ依レハ初メ同艦ハ樫野崎ヲ距ル東方二海里ノ辺ニ於テピストンロッドヲ折り為ニ進退自由ヲ失ヒ風力ノ為メ灯台ノ下ニ流サレ其所ニ岩石ノ屹立スルヲ見テ錨ヲ投セシモ錨鎖未タ張ルニ違^{いとま}アラシシテ船体岩石ニ触レ三度打付ラレタル後粉碎セルナリ

土耳其人ノ死体 土耳其人ノ死体ニシテ夜迄二十得シタルモノハ其数九十六其内八十四個ハ樫野崎ニ埋葬シ残り十二個ノ内一個ハ串本村ニ埋葬シ其他ハ紀州海岸中其打揚ラレタル所ニ於テ埋葬ヲ行ヘリ又オスマンパシヤノ死体ハ未タ発見スルコトヲ得スアリベイ艦長軍医一名ノ死体ハ既ニ拾得シテ同所ニ葬レリ

二十一日午後本官ハ加賀美軍医大監等發火兵一隊ト共ニ樫野崎ニ出張シ該島ヲ探検スルニ土耳其人ニ手当ヲ為セシ場所ハ大島村ノ一寺院ニシテ該寺院ニ四日間土耳其人ヲ置キ加療セシナリ埋葬ノ場所ハ樫野崎灯台ノ側ニ於テ新ニ地ヲ拓キ茲ニオスマンパシヤノ仮墓標アリベ一艦長ノ墳墓ヲ設ケ二十日夜マテニ其周圍ニ埋葬セシ土耳其人ハ七十九名ナリ土耳其軍艦ノ沈没セシ場所ハ樫野崎灯台南ノ直下ニシテ船体ハ其形ヲ留メス粉碎シテ岩石ノ間ニ打上ラレタルナリ今マ下橋ニ本半ハ浮ヒ半ハ沈ミ波間ニ漂フ所ヲ見レハ艦底ノ在ルハ蓋シ此所ナラン此亦岩石ノ間トス依テ灯台番人ニ就キ当夜ノ天候ヲ聞クニ当夜ハ十五日ヨリ吹続タル東風吹キ夜ニ入りテ雨ヲ加ヘ勢力凄愴ヲ極メ九時半ニ至リ南東ニ変シ倍々勢力ヲ加ヘタリト云ヒ其実況ヲ聞クニ当夜ハ風雨ノ為メ海上全ク暗黒ナリシカ午後十時頃一人ノ土耳其人滿身血ニ塗シ突然当直室ニ来リシモ当直者ハ其何人タルヲ知ラス言語通セス一時大ニ喫驚シ其為ス所ヲ知ラサリシ然ルニ赤裸ニシテ滿身血ニ塗レタル土耳其人九名モ亦程ナク同室ニ来リタルヲ以テ初メテ遭難ノコトヲ知ルヲ得直ニ大嶋樫野崎兩村ニ人ヲ馳セ且兼テ備付タル藥品ヲ用ヒ負傷者ニ手当ヲ施セリ其内天明ケ終夜岩石ノ間ニ潜伏シアリタルト云フ者続々灯台ニ来リト云フ又和歌山県ニ於テハ該艦遭難ノ報ニ接スルヤ書記官現場ニ出張シ毎日人夫百名ヲ使役シ死体埋葬等ノ手順ヲ為シ艦長以上ハ一々甕ニ収メ下士卒ハ箱ニ二名宛ヲ収メ埋葬セリ

二十一日午後五時本官ハ發火兵一小隊ヲ引率シテ土耳其人死体ノ埋葬式ヲ行ヒ地方官モ之ニ立会セリ独逸軍艦ニ於テハ埋葬式ヲ行ハサリシナリ蓋シ天候ノ為メ妨ケラレタリト云フ

土耳其人ノ死体ハ毎ニ海底ヨリ浮出ツル者続々之レアリテ之ヲ引揚ケタルニ隨テ其埋葬ヲ行ヒ大嶋樫野崎兩村ノ人民ハ男女ノ別ナシ村ヲ拳ケテ土耳其人救助ノ為ニ熱心ニ力ヲ尽シ地方官モ亦督促獎勵シ以テ之ヲ使役シ本官モ益々其搜索ニ盡力センコトヲ地方官ニ依頼セリ然レトモ仍ホ考フルニ只ニ海底ニ没在シアル者ノミニ止ラス艦内所々ニ挟マレ浮出ツルコト能ハサル者亦之レアラシキ艦底ノ所在ハ深サ十尋許ニシテ且（ウネリ）強キ所ナルヲ以テ極好ノ天候ニアラサレハ舟ヲ寄スルコトヲ得スト 雖モ天候ノ好晴ヲ俟テ非常ノ困難ヲ凌クアラハ潜水器械ヲ以テ水底ヲ探検スルコトヲ得ヘシ又和歌山県書記官ノ言ヲ聞クニ土耳其軍艦ノ碎片ハ今マ岩石ノ間ニ堆積セリ若シ今後暴風ノ之ヲ襲フアラハ全ク散乱漂流シテ其往ク所ヲ知ラサルニ至ラン早く其碎片ヲ聚拾スルコトニ内務大臣ノ訓令アランコトヲ希望スト

九月二十二日午前八時大嶋ヲ出航ス該島ニ残留セシ土耳其人二人ハ本艦ニ搭載シテ神戸ニ伴ヘリ而シテ同日午後二時神戸ニ投錨ス

